

創造都市ネットワーク日本 自治体サミット

このサミットは、わが国の創造都市間の連携交流を図ると共に、国内およびアジアをはじめとする世界の創造都市間の連携交流の促進を目指し、創造都市ネットワーク日本(CCNJ)に参加する自治体の長との情報、知見、経験などの交流を深めることを目的としています。

主催者挨拶 青柳正規文化庁長官

本日は、本サミットの開催にあたり、準備に当たっておられました一般社団法人ノオトの皆さまや、創造都市ネットワーク日本の顧問でいらっしゃいます佐々木先生、会場とさせていただいている横浜市、本日のためお越しくくださった各市長の皆さま、それからCCNJ加盟団体の皆さま、その他、多くの皆さまのこれまでのご尽力に対して心から感謝申し上げます。

第2次世界大戦終了後、日本は奇跡的な復興を成し遂げました。それは、戦禍を受けて、いろいろなシステムを徹底的に変えることができたからではないかと思いますが、経済成長の後で、現在は一定の成熟段階に来ており、目指すべきモデルがなくなってしまっております。今後、さまざまな格差が広がっていくと思いますが、この日本という社会をどのようにしていけば良いのか。例えば、地域の格差や社会的な格差、そういう格差をどのようにうまく拡大しないようにしていけばいいのか、そういった観点で、恐らく文化芸術創造都市という考え方が、一層重要な役割を担うのではないかと考えております。

現在、日当たりのいい都市、あるいは、さまざまな意味で行政的に国内やそれぞれの地域の中核を成している所、あるいは先端産業がたまたまあることによって地域が潤っている所、そういう日当たりの良い地域に比べて、現代のさまざまな条件の中で決して恵まれてない、いわば日当たりの悪い地域との格差が一層広がっているのではないかという気がいたします。その中で、決して日当たりがいいわけではないけれども、頑張っている都市が、最近たくさん日本の中で浮上しつつあるのではないのでしょうか。文化庁長官を拝命してから、約1年、さまざまな所を見せていただきました。地域奉仕がいかに関わって日本社会全体にとって、現在、喫緊であると同時に大変重要なものなのかを肌で感じてまいりました。空洞化で衰退していくような成熟国家の多くは、経済や産業ではなく、文化芸術が持つ創造性で地域を活性化させようとしております。この取り組みで一番重要なことは、それぞれの地域に住む住民の方たちが、自分たちで何か作品を作るように工夫しながら考える、試行錯誤し、苦心して何かを生み出すという過程ではないかと思われまます。これは芸術文化創造都市の創造という部分に込められているのと考えております。また、政府でも、内閣を挙げて地方の町、人、仕事を力強く推進をする政策の審議が国会でも行われております。そして、文化庁でも、こうした潮流の下、国が画一的な施策を推進するのではなく、いかに地域に合ったものを創造するかが大切だと考えております。そのためには、何より、そこに住んでいる方々の心意気や誇りが一番大切であります。そこで、いろいろ創造し、悩み苦しみ、そして何かを生み出す過程が大切であり、創造都市という言葉は、今、われわれの社会の中で、その重要な役割を担っているのではないかと考えております。

この芸術創造都市に関して、私は、市長や町長といった自治体の首長のイニシアチブが非常に重要だと考えております。例えばユネスコの創造都市でも、やはり、各市長さんのイニシアチブによって町が

蘇っていくという例を、例えばナント市や横浜市、金沢市など、創造都市で先行している所である市長の存在が、実に大きな役割を担ってきており、また、長期にわたり市長をなされているケースが多いかと思えます。多くの自治体でイニシアチブを発揮し、中長期的に文化政策を担う首長の存在があることを、我々は素晴らしいこととして意識せざるを得ないのではないかと考えています。

以前は、社会の仕組みが今よりも、かなり単純でありました。単純であったからこそ、国が一律の政策を決めて、それが日本全体に、あまねく一定の高揚を持って浸透していたと行うことができましょう。しかし、社会が複雑になってくると、各地域での必要なもの、あるいは、そこで充足しているものが次第に違ってきておきまして、その結果、地方分権が、以前よりはるかに重要な役割を担うようになっていこうと考へます。それに伴い、国の役割は以前よりも小さくならざるを得なく、各地域で特性に合った政策を、その地域が作り上げて実行していかないと、真に有効で効果的な行政ができなくなっているのではないでしようか。

このような背景があり、さまざまなことで、地方の判断に任せる政策ができてきておきます。その結果、地域を活性化する際に、地域の首長や議会が、ますます重要になっていると同時に、そのことを支えるための一人一人の市民が、その地域の強みは何か、どうすれば自分たちの生活が、より質が高く安全なものになるのか、それぞれ主張せざるを得なくなっております。もちろん、一人一人がマクロな政治に関わる必要はないのかもしれませんが、自分たちの生活を守るためには、ある一定の主張をせざるを得なくなってきました。このことは、現代社会の過去10年ぐらい前とは、大きく違う状況ではないかと考へておきます。地域に住む住民の方たちが、自らの創意工夫により、文化芸術が持つ創造性で地域を活性化させる文化芸術創造都市の取り組みは、成熟社会である、わが国において、ますます重要な役割を担うものとして考へておきます。それぞれの地域に住む方が、いかに、さまざまな文化資源を生かし、ブラッシュアップして定着化し、そして長続きするようにしていくかが、文化芸術創造都市の根幹であり、その取り組みを推進することが、地域への誇りや、それに伴う活力につながり、ひいては、少子高齢化や地方の疲弊など、成熟社会が生み出す社会課題の解決や、あるいは国際的な貢献にも結び付くのではないかと考へます。

2020年には、東京オリンピック・パラリンピック競技大会が開催されます。この2020年をスポーツだけではなく、文化の祭典として、日本全国を文化の力で盛り上げたいと考へておきますが、そのためにも、皆さまに中核を担っていただきたいと思ひます。皆さまにおかれましては、2020年を地元の魅力の再発見や、海外からの来訪者の増加の契機として積極的に活躍していただくと共に、それが一過性のイベントに終わることがないように、継続して文化振興にお取り組みいただきたいと思ひます。文化庁としても、今後ともCCMJのような意欲ある自治体や団体の皆さまで構成されたネットワーク組織の支援をしていく所存でございます。皆さまがたのお取り組みの一層の発展を期待して、ごあいさつと致したいと思ひます。どうもありがとうございます。

開催地挨拶 林文子横浜市長

皆さま、こんにちは。横浜市長の林文子でございます。本日は全国から、本当にたくさんの方にお越しいただきました。心より歓迎申し上げます、御礼を申し上げます。本日、創造都市ネットワーク日本(CCNJ)の8都市の市長が集まり、また、文化庁青柳長官にもご支援をいただきながら、CCNJと

して初の自治体サミットを、ここ横浜で開催できますことを本当に光栄に思います。ご参加の皆さま、そして、開催にあたり、ご尽力くださいました皆さまへ、あらためて深く御礼を申し上げたいと思います。このCCNJは、昨年1月、文化芸術が持つ創造性を活用したまちづくり、創造都市施策に取り組む都市により発足をいたしました。それぞれの豊富な経験と知見を共有するために、政策セミナーやワークショップ等の活動を重ねてまいりまして、また、文化庁様にもご支援をいただき、連携や交流を深めてまいりました。

設立当初、23だった参加自治体数は、現在、実に41まで増加しております。また、加盟団体は、自治体のみならず、NPOや文化活動団体にまで広がっております。現在、国においても「地方創生」が重要施策に位置付けられる中、文化芸術の創造性によりまして、地域課題の解決と、さらなる活力の創出を目指す「創造都市」の取り組みは大きな期待を集めております。本日のテーマに掲げているとおり2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催は、文化芸術、創造都市の取り組みにおいても、大きな節目となります。世界中の注目が集まる中、日本全国で展開されるオリジナリティあふれる文化・創造都市の取り組みを一層強化して、広く発信していくチャンスでございます。

既に下村文部科学大臣からも、文化プログラムの盛り上げに向けて、力強いメッセージも頂戴しております。私たち創造都市が、どのような役割を果たし、また、今後の文化施策の展開に、どのような可能性を示すことができるか、ぜひ、皆さまと議論をしてみたいと思います。

また、本日は、CCNJ顧問の佐々木雅幸先生から、『東アジア文化都市を契機としたネットワーク形成』と題して、お話をいただきます。

今年始まった、この東アジア文化都市事業で、横浜は中国の泉州市、韓国の光州広域市と共に、開催都市を務めさせていただいております。この1年を通じて多くの方々に、東アジアの多様な文化に触れていただき、アーティストはもちろん、市民相互の交流も深めてまいりました。

中でも、夏に実施いたしました青少年による交流は、3都市の将来を担う世代の相互理解と交流を深める、非常に有意義なものでした。また、私どもも各都市の文化芸術ビジョンと、その背景に触れ、大変多くのことを学んでおります。

CCNJとしても、今回のサミットが、あらためて、各自治体の取り組みに学び合い、また、今後一層、連携を進めていく契機になることを、開催都市として大変強く願っております。

ただ今、青柳長官からお話いただきまして、私は大変、感銘を受けました。日本の文化芸術、今まで取り組んできたことが世界から見てどうなのかという大きな課題についてもお話をいただきましたし、私たち基礎自治体、このCCNJのネットワークがどれだけの可能性を秘めており、何をしなければならぬのかということを示唆していただいたと思っております。文化庁様、文部科学省様からも力強い後押しをさせていただいており、まさにチャンスが来たのだと思っております。

日本もインバウンド1000万人を超えまして、次は2000万人、3000万人と言われております。しかし、一番は、国民、県民、市民の方々が創造活動に参加できるように広めていく、そのつなぎ役を務めるのは私たち基礎自治体だと思っております。そういう意味で、今日のシンポジウムは大変意義あるものになると思います。活発な議論をさせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

基調講演

文化庁文化芸術創造都市振興室長、同志社大学経済学部特別客員教授、佐々木雅幸氏

こんにちは。今から50分程お時間を頂きましたので、東アジア文化都市事業と、この創造都市ネットワーク日本の関係、それから今後の展開の方向について、私が考えていることを、お話しさせていただきますと思います。

まず、「欧州文化都市」という事業がございました。これはギリシャの文化大臣のメリナ・メルクーリさんと、フランスの文化大臣のジャック・ラングさん、この2人が、たまたま、ヨーロッパの文化大臣会合のうちに喫茶店で話し合っ、そこから始まったということ、伺いました。それからこの写真は河合隼雄元文化庁長官でございます。私は十数年前にイタリアのボローニャに留学をしておりまして折りに、たまたまフィレンツェにおいて、日本とヨーロッパの文化関係者が会合を持つ機会に同席させていただきました。そのときは、まだ、河合先生は長官になる前だったのですが、話題はやはりEUが進めておりました「欧州文化都市」、その後、「文化首都」という形に言葉が変わりましたが、その事業の成功について、これを日本でも何とか実現したいし、できればアジア規模で、そういった事業ができないだろうかということ、ワインを飲みながら話をしておりました。その後、河合先生は長官になられて、今私が拝命しております文化芸術振興室長、この振興室は京都府庁の本館に分室の形で置かれているのですけれども、河合先生が長官になられたときに、国立京都博物館の施設に関西分室が発足しました。それを引き継ぎまして、私は文化芸術都市振興室という事業を率いているわけですが、何かの縁があったのかもしれない。

さて、「欧州文化首都事業」というのは一体どういうフレームのものであったかということ、おさらいをしてみますと、この後、モデレーターをします太下さんなどと一緒に調べてきたことなのですが、EU加盟国の中から、毎年、「欧州文化首都」として、都市を選定し、その都市が年間さまざまな文化事業を行う。その大きな目標というのは、EU統合開始の年が1985年でございます、目前に迫ってましたので、その統合されるEUの中で、都市ごとに文化多様性を広げるといふことと同時に共通性つまりEUとしての一体性という、多様性の中の統合といふことが、大きいテーマとしてございました。3番目が、ヨーロッパの小都市は、産業革命以来製造業が発展していたのですが、これが20世紀の末に、ことごとく衰退産業になりましたので、経済ではなくて文化で地域を再生しようといふ方向が出てまいりました。地域再生を文化芸術でやろうといふことになったわけです。そして4番目に、この文化活動を通じて市民生活の質を向上し、あるいは市民の連帯感を高めるというような目標を持って、「欧州文化首都」が展開されました。毎年それまで1都市でしたのですが、西暦2000年に、一気に9つの都市が事業を展開し、それ以降は毎年2都市が選ばれております。EUの各国が都市を選定するといふ形で事業を展開してきました。

これに対して、「東アジア文化都市」は全く新しい取り組みでございまして、その経緯となりましたのが、2011年に奈良で行いました第3回日中韓文化大臣会合の場において、日本側から中国、韓国に提案し、そしてこれが合意を見て、2014年から取り組みが行われるということになりました。この「東アジア文化都市」の場合、EUの「文化首都」と違うのは、EUという統合した政治体はないわけです。従って、まず日中韓3国がそれぞれ都市を選定し、その交流を通じて相互の理解、連帯感を形成しようといふことでございます。同時に、東アジアの多様な文化といふものを国際的に発信する。そして3番目に

は、そのことを通じて都市の活力を再生あるいは高めるといったことが目標として挙げられるわけであり、先ほど、横浜市の林市長がお話しになりましたけれども、初代の日本側の東アジア文化都市としては、横浜市が選ばれて事業を展開し、現在はクロージングに向かって大きな盛り上がりを作り出しているところでございます。

さて、この「東アジア文化都市」あるいは「欧州文化首都」という事業について、われわれ研究者が、どのように概念的に、その理論的な方向性を考えてきたかといったことを振り返ってみますと、私の友人でもあるチャールズ・ランドリーという、国際的な場で活躍していますコンサルタントはこの9月のユネスコの創造都市ネットワークの年次総会でもゲストで発表し、つい先週、アジアとヨーロッパのASEM会議においてもゲストのスピーカーとして招かれておったのですが、21世紀の冒頭にTHE CREATIVE CITYという非常にインパクトのある本を出しました。彼のこの本の基礎になったのは、1985年から始まった「欧州文化首都事業」です。それらの実践的な経験をまとめておりましたので、説得力のある問題提起をすることができました。ここでは、中心的概念というのは、クリエイティブ・ミリュー (creative milieu) という言葉を使っております、都市が抱えるさまざまな問題、これは失業問題であったり貧困問題であったり、あるいは社会的排除の問題であったり、こういった問題を解決するというのを創造都市の大命題にして取り上げました。併せて、創造産業、クリエイティブインダストリーという新しい産業群にも関心を寄せたわけであります。

従いまして、この創造都市という言葉は、一言で言えば、文化と創造性による都市再生ということができ、20世紀から21世紀にかけて、地球経済が大きな変動を経験した、グローバリゼーションと地域情報経済化、その中でグローバル化に一面的に流されるのではなくて、都市が持っている文化的伝統を再評価し、そして市民のアイデンティティを確固としたものにしなが、未来に向かって新しい文化を創造すると。そういうことを通じて地球環境との調和を図る持続可能な都市をつくろうというテーマになっていったわけでございます。

特に、この考え方は、イギリス政府が早くから政策化を致しまして、イギリスの文化・メディア・スポーツ省が、創造産業という統計書を出すことによって、世界的に創造産業に大きな注目が集まりました。先ほどご紹介しましたASEMの文化大臣会合の今年の共通のテーマは創造産業でございまして、文字通り世界中の文化大臣級の方々が、それぞれの国での、創造産業の振興、現状について熱く語るということでありまして、今や創造性革命みたいなことが、全世界で起きていると言っても過言ではございません。このイギリスの政府の中でも、特にロンドンが中心的な役割を果たしたわけですから。ロンドンでは、ケン・リヴィングストンという市長が登場しまして、クリエイティブロンドンという政策を約8年間にわたって展開しました。これは、よく言われることですが、その最大の成果の1つは、まさにロンドンオリンピックの成功に結び付いたということであったと思います。それまでは、オリンピックというのは、スポーツの祭典だと思われていたのですが、ロンドンが試みたことは、カルチュラルオリンピックという文化の祭典であって、それもロンドンのみならず、イギリス全土を対象にして、オリンピックの前の大会が終わってから4年間にわたって、大々的に文化イベントを展開したわけですから。18万イベントで、4300万人の市民が参加をしたという成果があったといわれております。こうして、創造都市というキーワードが具体的に国を動かし、そして地域を再生していく。オリンピックも、また、その姿を変えるということになってきたわけで、今は2020年を前にして、先ほど青柳長官、林市長が、

ともども語られましたけれども、東京オリンピック・パラリンピックを前にして、創造都市ネットワーク日本としては、このイギリスの経験を学びながら、さらにそれをしのぐというような取り組みが、今必要になっているのだろうと、あらためて思う次第でございます。

このイギリスあるいはヨーロッパの動きに呼応する形で、アメリカではリチャード・フロリダという経済学あるいは社会学の学者が登場致しまして、クリエイティブクラス、創造階級という新しい社会階級について関心を喚起致しました。この一群の社会階層の共通点は、創造的な仕事に何らかの形で関わっているということでございまして、自然科学や社会科学の研究のみならず、アート、デザイン、エンターテインメント、スポーツ、メディア、こういった領域です。そして、それを支える専門職の人たちを合わせると、なんと、アメリカでは今、全就業人口の3割が、何らかの意味で、クリエイティブクラスに属する。そうすると、クリエイティブクラスが集まる都市でなければ発展しないというのは自明のことだということをお述べました。アメリカ国内では1965年に既に、製造業よりサービス業が上回るのですが、1990年の段階で、創造階級というものが製造業よりも上回るということでございます。ここでのキーワードは、創造的な人々は、例えば、ゲイやレズビアンのような同性愛者のような新しい社会通念を持った人たちを排除しない、寛容性のある社会でなければ創造都市にならないという問題提起をした。つまり、寛容性という言葉が新しいキーワードとして浮かび上がったわけです。クリエイティブ・ミリュー、創造的な環境ということと寛容性、この2つが創造産業や創造都市を発展させるという切り口が生まれました。例えば最もゲイピープルが多いのは、アメリカのサンフランシスコだと。従ってサンフランシスコの湾を下っていきますとシリコンバレーがあって、シリコンバレーのハイテクの技術者とサンフランシスコのアーティスト、クリエイティブな人たちが一緒になって新しい産業もつくっている。これが、クリエイティブな産業クラスターに結び付いているという展開でございます。

このように、イギリス、ヨーロッパ、そしてアメリカ、北米全体で、創造産業、創造都市ということに関心が広まったときに、ユネスコは、この流れをつかんで、2004年から創造都市のグローバルネットワークというものを提唱するようになりました。それに先立って、ユネスコは2001年に「文化多様性に関する世界宣言」というものを採択しております。この当時、WTOにおいて、映画だとかテレビ番組などのような文化的コンテンツまでも貿易自由化の対象にするということがございまして、これに激しくフランス、イタリアの映画産業が抵抗していたという経緯がありまして、グローバル化の中で、その多様性を喪失していくと、これは人類的な損失だということで、グローバル化の中でこそ、むしろ文化の多様性を高める必要がある。文化を創造し、保存し、発展するのは、都市の仕事ですから、創造都市というものが、全世界的ネットワークを組んで、この文化多様性というものを高めようという志でユネスコはネットワークを始めたのです。

現在のところ、これはCrafts and Folk Art、Music、Literature、Design、Media Arts、Film、Gastronomyの七つのジャンルで、41の都市が加わっているわけでありまして。このユネスコのネットワーク、今はまだ、ヨーロッパとアジアが多いのですが、現在審査中のものを含めると、今年の11月末にはさらに30程度増える、早晚100にいくだろうと思われまして。世界遺産が今1000を超えようとしておりますので、世界遺産まではいかないわけですがけれども、恐らく、ユネスコからすると世界遺産に次ぐ大きなヒット商品というほどでもないですがけれども、中心的な施策になってくるのではないだろうかと考えております。

今日のテーマは、東アジア文化都市とネットワーク形成ということでございますが、創造都市のネットワークとは、一体何を指して、どのような活動をするのかということを考える上で、このユネスコのネットワークの考え方が参考になると思いますので、これについて触れておきたいと思います。ユネスコは国連の機関でございますので、国連が掲げています、持続可能な発展、持続可能な社会の実現ということは大命題でございます。これを実現するのは、実は、都市の在り方が大きいわけです。都市が持続可能でなければ、地球経済全体がうまくいかないわけです。都市というのは、ほとんどの経済力を持っていますから、その都市が金融不安に巻き込まれて破産するようなことがあってはならないし、環境破壊の下で人間が住めなくなっても困るわけです。従って、都市こそ発展のための担い手であり、同時に新しい産業や新しいライフスタイルを生む創造活動の要であると。つまり、クリエイティブ・ハブであって、この新たなる社会や文化を創っていくクラスターというものを持っているのだと。このネットワークは、従って、創造都市というものが集まって、この地球全体の持続可能な発展と文化多様性というものを実現するためということが、共通のミッションである。同時に、そのために創造産業を振興する、あるいは、グローバルなパートナーシップを育成する、あるいは、国連だとか各国政府に対して、政策提言活動を強化する。そして、また、創造産業の発展のための、さまざまな手だてを具体的に考える。そして、さらに大事なことは、地球の中で今、大きな社会的な格差がある。地理的な格差がある。グローバル・サウスという大問題がありまして、飢餓と貧困というのは、あるいは疫病は、このグローバル・サウスから起こってくるわけですが、ネットワークの大命題というのは、この地球の中で貧困にあえいでいる南の都市、地域を、どうやって支援しながら、クリエイティブにしていくかということが掲げられております。

過去2008年から、毎年、年次総会が開かれ、2011年には、ソウルにおいて、初めての市長ラウンドテーブル会議が行われました。今年是中国のシンセンにおいて会議が行われていまして、ここで来年度は日本の金沢市が、この年次総会を行うということが確認されました。本日出席の山野市長がソウルのラウンドテーブル会議に参加されて、ここで強いメッセージを寄せられて招致に成功したわけでございます。私どもとしては、このユネスコのネットワークというものと、「東アジア文化都市」あるいは「創造都市ネットワーク日本」相互の関係、連携をどう強めていくかということ、今後考えていかなければならないし、金沢におけるユネスコの世界会議をCCNJ全体としても成功に導くことが必要なのではないかと思っております。

さて、ここで、歴史的に日本における創造都市のムーブメントを振り返ってみたいと思います。日本で最初に創造都市という言葉が都市政策の中で具体化したのは、金沢市でございました。そして、市の行政機構の中で初めて、創造都市推進課というのを置かれたのは、横浜市でございます。そういった意味で、金沢市、横浜市が相次いでCCNJの会長を務めておられますが、この2つの都市に次いで、神戸市、札幌市、京都市、そして名古屋市といった都市が創造都市に関連する条例を作られたり、ユネスコの創造都市としての認定を受けるというところになってまいります。そして、この都市から始まった動きを文化庁がさらに積極的に支援をするということを2007年から行いました。2007年、現在顧問をしていた青木保先生が長官をなされているときに、文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）を開始されまして、毎年四つないし五つの都市を表彰致します。これらの都市が集まって会議をする場所を持つことができるようになりました。

さらに、2010年からは、文化庁が文化芸術創造都市モデル事業を開始致しまして、そんな大きな金額じゃないのですが、小さい都市でも、小さい自治体、つまり農村など財政力の弱い所でも、創造都市事業を展開するための支援が、ここから始まりました。それによりまして、「創造農村ワークショップ」というものが開始され、仙北市、篠山市、木曾町、東川町という形で、第4回を今年数えております。おそらく第5回は十日町市でやっていただけるのではないかと考えております。都市から始まったものが農村まで広がってきて、今日本の地方創生ということが大きいテーマになっているわけですが、私どもは、それを先取りし、「創造農村」ということを考えて展開してきたわけでございます。

ちょうど、この2011年は先ほど申しましたように、日中韓の文化大臣会合において、東アジア文化都市事業を、日本側から提唱するということになりましたので、ネットワークというものが大きな都市、中規模都市、そして小さな自治体に広がると共に、アジアを視野にして、さらに、重層的展開をするということを目指してきたわけでございます。この中で、2013年1月に横浜市において創造都市ネットワーク日本の立ち上げが行われました。先ほど林市長がお話しになりましたように、23自治体で出発し、現在41自治体にまで拡張しております。この年、札幌市が、メディア・アーツの分野でもユネスコ創造都市として認定を受けるということで、この流れは確実に広がってまいりました。そしてさらに、この東アジア文化都市事業が開始されるというわけでございます。

個別に幾つかの都市について触れてまいりますと、2001年に金沢市が創造都市会議を始めるきっかけは、実は経済界が音頭を取りまして、金沢経済同友会という経済団体が、「21世紀の産業政策は創造都市だ」と、創造産業というものを都市で発展させないといけないということを早くから認識されまして、そして、この福光さんという方が委員長になって、推進会議を進めます。これを受け止めたのが、当時の山出保金沢市前市長でございます。早速2004年には、金沢21世紀美術館ができました。これは、今年10周年を迎えますが、毎年来場者150万人ぐらいの、現代アートの美術館としては奇跡的な成功を見たわけでございます。やはり、クリエイティブな場所、クリエイティブな空間というものを都市の中に作り出すということの意味が、この美術館1つでもって、はっきりと示されたと思います。さらに、この美術館の中で、伝統工芸の現代的な展開をにらんだ、さまざまな催し物が行われるようになりまして、ユネスコの創造都市として2009年に金沢市が認定を受けたということでございます。

この金沢市の動きを察知しながら、横浜はさらに大胆な事業展開をされまして、2004年には、日本で初めて行政の中に創造都市推進課を設置されまして、事業を展開します。現在展開しております横浜トリエンナーレは、2001年から始まってありますが、さまざまな拠点やアートセンターを広げており、共通するのは、使われなくなった銀行の建物、郵船の倉庫、古い工場跡、そして私鉄電車のガード下の汚いスペース、こういった所をアートスペースに展開し変えてくるということで、横浜では創造界限という言葉を用いて、境界にクリエイティブ・ミリューというものを広げてきて、ここに創造産業が張り付いていくという流れが出てきたわけでございます。先ほど、社会問題の解決に、芸術を活用するということがありましたけれども、違法特殊飲食店、いわゆる旧青線・赤線地区を再生する、黄金町バザールというようなアート事業も成功裏に進んでいるところでございます。

このように、金沢、横浜、そして、神戸、札幌、京都と、有力な都市を中心にして始まった創造都市の流れの中に、創造農村という、もう一つのアプローチが生まれます。木曾町の前町長の田中勝己さんが、私のところへ来られまして、「創造都市っていうのはいいけど、これは農村にも適応できるだろう。

創造農村ということをやってみたいけどどう思う?』と聞かれまして、私はびっくりしました。「創造農村」なんて考えてもみなかったわけです。では本格的に取り組んでみようということになり、文化庁の近藤誠一前長官が、「全国あちこちで、この創造農村を広めるというワークショップやったらどうだ」ということでご支援いただきまして、2011年から創造農村の取り組みも始まりました。

実は、創造都市ネットワーク日本を立ち上げるにあたって、「創造都市田園ネットワーク」という名称にしたらどうだという強い意見もございました。ただ、ユネスコも創造都市ネットワークと言っているので、とりあえずは、日本でも創造都市ネットワークとして、そこに創造農村も入るといいう理理解でいきたいという形で出発しました。しかし、中身としては、この創造農村について、もっと意識しよう。第2回は、現在事務局を担当しておりますノオトのメンバーが中心に活動しています篠山市、ここで行われまして、創造農村に関する積極的な、理論的な問題提起が行われました。第3回が木曾町で行われ、今年の第4回を東川町で開催してきたところでございます。また、この中で、鶴岡市においても創造都市政策セミナーを開催させていただきまして、現在、篠山市と鶴岡市が創造農村を代表して、幹事市として参画いただいているということでございます。こうした流れの中で、2013年1月13日、先ほど言いましたように、この横浜市において、ネットワーク日本が設立されたわけでありす。

ここから、横浜の東アジア文化都市事業について、話をしてみたいわけでありすが、この約10年にわたる、日本における創造都市の流れの中で、横浜市は創造都市施策の第2ステップとして、東アジア文化都市事業の展開を位置付けるという考え方を採って積極的に、この事業に取り組まれたというところが特徴だと思います。大体、われわれは、10年というのを一つの区切りにして考えるわけでありすが、2004年から始まった横浜の創造都市づくりが2014年から第2ステップを迎えるということで、東アジアをにらんだネットワーク作りに関して積極的に交流し、日本の創造都市ネットワークの方向性を示すというような意気込みが、ここに感じられるように思いました。

私も、この実行委員会に加わりまして、泉州と光州に出掛けたのですが、この横浜市が取り組んだ事業を簡単にご紹介しておきます。事業のコンセプトとして3つの柱を立てておりまして、1つが先駆性、開放性、これは横浜の気風です。港町横浜の気風。それから、中国、韓国をはじめとする東アジアや国内他都市との交流、共同。そして、地域の振興、経済効果。この3つの柱をバランス良く展開しようという考え方、これを3色で、スカイブルー、コーラルピンク、シルバーグレーで示すようなロゴを作っております。そして、この広報親善大使として、でんば組.incの女性たちが指名され、オープニングで、中国の泉州市の交流事業で舞台に登壇されましたが、中国の若い人たちは、一気に盛り上がりました。今、日本のカルチャー文化の最先端の力というのは、凄いですね。この東アジア文化都市事業に総力を挙げて、事業展開をされてきました。メイン企画は、横浜トリエンナーレということで、これは皆さんがたも、開催期間中ですのでご覧いただけたと思いますが、森村泰昌さんの、メッセージ性のあるアートの展開、特に大阪から釜ヶ崎の芸術大学というものを招致いただいて、釜ヶ崎のおっちゃんたちが作り出す芸術作品、これが横浜美術館のメインのスペースに展開しております。そういった作品も含めて現代アートというものは、社会問題というものにどのように向き合うかということが本当によく分かるような企画がされていると思います。

さらに横浜の事業は、林市長になられましてから、トリエンナーレだけではなくて、ダンス・ダンス・ダンスとか、あるいは音祭りだとか、ダンスや音楽というジャンルを広げてきて、よりその大衆性を高

めてきたというところも特徴かと思えます。つまり、横浜は市民を巻き込んだ大きな胸になるような事業展開をする中で、東アジア文化都市事業を迎えているということが、私どもは非常に参考になるなと思えます。

こういった中で、これから、私どもは、その東アジア文化都市事業を通じて一体どういう方向に事業の展開あるいは、その意義を見いだしていくのかということを考えてみたいわけではありますが、例えば作家の村上春樹さんが2012年に『朝日新聞』に書かれた、大変深みのあるメッセージがありました。少し読ませていただきますと、『この20年ばかりの東アジア地域における、最も喜ばしい達成の1つは、そこに固有の文化圏が形成されてきたことだ。そのような状況がもたらされた大きな原因として、中国や韓国や台湾の目覚ましい経済的発展が挙げられるだろう。各国の経済システムは、より強く確立されることにより、文化の等価的交換が可能になり、多くの文化的成果、知的財産が国境を越えて行き来するようになる。この東アジア文化圏は、豊かな安定したマーケットとして着実に成果を上げつつある。文化の交換は、われわれがたとえ話す言葉が違って、基本的には感情や感動を共有し合える人間同士なのだということ、1つの重要な目的にしている。それは、いわば、国境を越えて魂が行き来する道筋なのだ』と言っておられまして、東アジアにおける固有の文化圏、東アジア文化圏というものが、今後、私どものこの歴史問題とか領土問題を乗り越えていくときの大きな土壌といいたいでしょうか。そういう共通の感情、感動、これをより強く強固なものにしていくということが、この地域の平和と安定をもたらすに違いない。そのための事業が東アジア文化都市事業であると言ってもいいかもしれません。今や、国ができなくても、都市が率先して、そういった歴史的に意義のある仕事をやっていくという時代が来たのだらうと思っております。

さて、これまで申し上げてきたことを、まとめてみますと、以下五つぐらい挙げられるのではないかと思います。東アジア文化都市事業の成果と課題、これは、まだ、1年目が終わる直前ですので、あまり成果ということ言っちゃいけないのですが、第1が現下の複雑で困難な政治的環境の中で、3都市の市長および市民、関係者による献身的な努力の中で、初年度にふさわしい文化交流の実績が上がり、相互信頼の基盤が確立したと思われまます。第2は、都市間の文化交流の広がりや深まりが、東アジアの平和と持続的発展にとって不可欠な要素であることが確認されたと思えます。第3は、そのような中で、実は中国と韓国の都市は私どもより大変積極的な姿勢で取り組んでおります。例えば韓国の光州広域市は、20年間の計画を国が持って、東アジアのみならずアジア全域の文化的ハブ都市になると、こういう壮大なる計画を持って、初年度の東アジア文化都市事業を進めているわけです。そして、来年の初めには、光州事件の現場となった、かつての県庁舎跡が巨大なアートセンターとして生まれ変わって、ここをアジア全域の文化ハブにしていく。場合によれば、東アジア文化都市事業の継続的な事務局を担ってもいいというぐらいの強い意気込みを示しておられます。一方、中国は、当初は東アジア文化都市事業というのは、欧州文化首都のように各国が毎年やるのではなく、何年かおきに事業展開する。例えば、今年横浜がやりましたら、3年後に日本の都市が事業を展開するというタイプのを想定していたのですが、中国はたくさんの都市があるから、そんなことしてたら回ってこないから、毎年やりたいといわれました。韓国も、もちろんオーケーだ毎年やりましょうということになって毎年3都市ずつが交流していったら、これまで参加した都市の大きなネットワークを作れないかというようなことを言われていました。私もそうした会議に臨席しておりましたが、日本側のほうはちょっと受け身でございませ

て、「そうはいつでも、来年の予算決まってないので、簡単にオッケーはできない」というような内情もございました。しかし、流れは大変強うございます。中国、韓国は、国を挙げて文化産業、創造産業、創造都市を進めるという強い意気込みを持っていますので、私どもは、これをしのぐ大きな展望を持って展開していく必要があるとあらためて思っております。従って、第4が、ユネスコの創造都市ネットワークは全世界レベルのものでございます。そして、国内のネットワークは、わが創造都市ネットワーク日本がございしますが、これらと連携していきながら、アジアレベルでの創造都市ネットワークを展望するということが極めて重要になってきております。第5に、こうした展開は、差し当たって2020年の東京オリンピック・パラリンピックにおける文化プログラムを全国展開する。東京だけが元気になるのでは困るわけで、この文化プログラムの全国的展開を創造都市ネットワーク日本が担う、その中心になる。そして日本全体をクリエイティブにする。併せて、この東アジア文化都市事業をCCNJとしても、連携しながら強めていくという重層的な視点を持って進めていく段階に来ていて、この流れは大変に速いし、恐らく、もっと強まってくるのだらうと思えます。

そういった意味で、私どもは、国内の創造都市ネットワークを持っている。いまのところは中国、韓国にはないわけです。まだ、都市がバラバラに競争している。われわれは、お互い連携して、情報を共有しながら取り組んでいる、この強みを、さらに発揮をしていきたいなと考えておまして、将来やっぱりアジアにおける創造産業のネットワークというものが、先ほどの村上春樹さんが言われたように、東アジアからアジア全域の文化圏に広がっていったときに、さらに大きな、うねりになってくると、このように思う次第でございます。

これから、第2部では、各都市の市長さんによるディスカッションがございしますが、ぜひ、これからの方向について、積極的なご提言をいただければありがたいと思う次第です。どうも、今日は、ありがとうございます。

テーマ I 文化景観や資産を生かした創造都市、創造農村の発信とCCNJの役割
榎本政規鶴岡市長、山野之義金沢市長、酒井隆明篠山市長、仲川げん奈良市長
進行／三菱UFJリサーチ&コンサルティング 太下義之氏
コメンテーター／東京藝術大学 熊倉純子氏

太下氏:それでは、最初のテーマを始めていききたいと思います。最初のテーマは、文化景観や資産を生かした創造都市、創造農村の発信とCCNJ—Creative City Network of Japanの役割と、ちょっと長いタイトルになっておりますけれど、登壇していただいている四都市の市長さんの顔触れを眺めると、各市とも歴史的、文化的な伝統がある都市ばかりです。そういった歴史的な文化的な資産を生かして、今どういう取組をしようとしているのか。それが、さらに、このネットワークの中で、どういうふうに活性化されていこうとしているのか。また、これからのタイミングとして、2020年に東京オリンピックが開催されますけれど、これに合わせて行われるであろう文化プログラムの中で、これらの地域資産がどう生きていくのか、こういったことをテーマにしながら、お話をいただきたいと思います。

皆さんのお手元に、この創造都市ネットワーク日本の自治体サミットというパンフレットがあるかと思いますが。この中に、各都市のご紹介もありますけれど、これを読んでおいてと言うだけでは味気ないと思いますので、最初に、せっかく今日ご参集いただいた4都市の市長さんに、ここに書いていることを踏まえながら、各都市の現状、それに対する創造都市政策のお取り組みの紹介を、この席の並びの順番でお伺いしたいと思っています。最初は、鶴岡市の榎本市長に食文化創造都市の取り組みについて、お話いただければと思います。よろしくお願いします。

榎本鶴岡市長:ありがとうございます。山形県鶴岡市の市長を務めております榎本政規と申します。鶴岡市といっても、皆さん、ご存じないかもしれません。日本海側に接する、13万5000の人口ですけれど、行政面積だけは13011キロ平方、市レベルでは全国7番目の行政面積を持っています。地形的には、霊峰月山、出羽三山。そして、それから流れる赤川、そして穀倉地帯で有名な庄内平野と日本海という。基幹産業が農業でありますけれども、そういう観点からすれば、日本で一番原風景が残っておるといわれております。毎年、日本には台風が襲来するわけでありまして。私どもの地域は、ぐるっと山に囲まれ、そして日本海に面している関係から、私どもに台風が来るときには、もう既に温帯低気圧になっております。そして、春夏秋冬、四季が一番はっきり残っている所と言われております。そんな関係で私ども鶴岡、食文化で、これからいろんな形で世界の皆さんと一緒に手を携えて取り組んでいければと思っていますところでありまして。と申し上げるのは金沢市さんも、あるいは京都市さんも、京野菜あるいは加賀野菜で有名ですけれども、私どもの所も在来野菜がいまだに、この庄内・鶴岡に50種類ほど、ここにしかないといわれている野菜が作られております。それは農家の皆さんの種を保存する意識の高さと共に、保存してきたものを、うまく発掘して、そして世に出さしてくれたのが山形大学の、農学部だったんじゃないかなと思っています。農学部の先生がたが、もう廃れていくと思われていた種をもう一度世に出していこうという形で取り組んでおられます。それらを使って地元の食材を作り上げていきたいなと思っています。

それと共に、ご存じのとおり、西の伊勢参りといわれているとおり、東の奥参りといわれている出羽三山の修験の山がありまして、ここは、当然修験でありますので、動物性の食物は使っておりません。精進料理といわれる山菜を中心とした伝統的な食文化が残っております。先般、パリにおいても、この出羽三山の精進料理を持ち込んで、フランス人に対して食のPRをさせていただいたところでもあります。そして、もっと変わっているのは、500年以上経っている国の重要文化財となっております、黒川の農民芸能の1つであります。ここもまた変わった食材をいまだに、保存をしているところでもあります。そんなことを通して、日本の各地域と一緒に、日本の食文化、和食をPRしてまいりたいと思っております。今年の11月には、ユネスコの創造都市ネットワークの食文化で認定が受けられれば良いということで、市民の皆さん挙げて取り組んでいるところでございます。どうぞ機会がありましたら、ご来客をいただければと思います。以上でございます。ありがとうございました。

太下氏:榎本市長、ご紹介ありがとうございました。私も鶴岡は既に何十回もお伺いしておりますけども、今、ご案内あったとおり、鶴岡市内には修験道という日本古来の宗教の総本山である羽黒山があります。修験道というものは、豊穰を祈るための宗教でもありますので、古来より全国から鶴岡に植物の種子が持ち込まれて、そこで種子の交換がなされたのではないかとされています。それが、今の在来作物の伝統につながっています。さらに、黒川集落には500年以上の伝統がある黒川能が継承されています、500年以上ということで、能の初期の姿をとどめたような形で、それを農村集落が継承しているということです。榎本市長ご自身もおっしゃってございましたけれど、日本の原風景を残している、日本全体にとっても非常に貴重なエリアではないかと思っています。そういった文化的背景のもとで、独特な食文化が、今日にも生きているということですね。どうもありがとうございます。では、続きまして、金沢市の山野市長のほうから、ご紹介をお願いします。

山野金沢市長:皆さん、こんにちは。今日はこういうお時間頂きまして、本当にありがとうございます。創造都市ネットワークのことに特化したお話しさせていただければと思います。恐らく、ここにいらっしゃる皆さんに、金沢市のイメージと聞いたら、多くの方が、歴史、伝統、文化、学術というふうにおっしゃっていただくのではないかと思いますし、そのとおりです。その中で、色々なものがありますけれども、金沢の個性、金沢の魅力、金沢の強みを1つ挙げると言われたら、私はやっぱり、工芸、クラフトを挙げたいと思っています。そして、その工芸、クラフトに深み、奥行きを与えるのは、食文化だというふうに強く確信をしているところであります。先人もその思いであったと思います。金沢美術工芸大学という大学をお聞きになったことをある方も、たくさんいらっしゃると思いますが、実はこれは戦後すぐにできました。これは、まさに金沢の先人が金沢というまちには工芸のまちということを強く理解をされていて、当時の市長さんや議会の皆さん、職員の皆さん、市民の皆さんがご理解いただいたからこそ、金沢美術工芸大学が戦後間もなくできました。間もなく、開設70年になります。平成元年、金沢市制100年に合わせまして、当時の市長さんがしっかりとしたことをやろうということで行いましたのは、卯辰山という緩やかな山に建物を造りまして卯辰山工芸工房というものを設置しました。どういふものかといいますと、工芸に関わっていらっしゃる方、中高校生とか大学生ではなく、専門の教育を受けられた方を研修生として受け入れる。そこで2年間研修をしていただく。しかも、授業料をとる

のではなく、月々10万円研修費という名目でお渡ししている。さらに、研修生は、金沢、石川県に限るなんてことはありません。全国どころか世界中から来ます。そういう方たちが金沢でしっかり工芸を学び、多くの方が金沢、石川県に残るのですけれども、東京や全世界へ向けて、活躍する方もいらっしゃる。それについて、税金の無駄遣いという声を僕は聞いたことがない。恐らくは多くの市民の皆さんは、そこで学んだ方が、他の所に行って、海外に行ってもそうですけれども、金沢の卯辰山工芸工房で学んだという自負を持って発信をしてくれることが、金沢の工芸の都市としてのブランドを上げていくことに繋がっている、というふうに思っております。

ありがたいことに、ユネスコの創造都市ネットワークにクラフト部門で、お認めをいただき、さらに拍車がかかりました。クリエイティブ・ワルツといいまして、まさにネットワークを活用し、金沢から若い方が研修で他の創造都市へ行きました。その都市からも金沢に受け入れます。そうやって若い方たちが相互に行き来して、そこで学ぶことによって、これまで自分たちが学んできたことに、さらに、刺激を受けて戻ってくる。また、来た方から、金沢の職人さんも、金沢のさまざまな文化も刺激を受ける。そこで新たな化学反応が起きて、その化学反応が文字通り付加価値を付け加えることによって、金沢の文化が、さらに持続可能、持続発展的なものになっていっているのだと思っています。

さらに一步踏み込んだことを、昨日致しました。銀座1丁目に、恐らくは市町村では極めて珍しいと思いますけれども、金沢の魅力発信拠点を構えました。これは金沢の物産を売っていくではありません。僕はいつも言うのですが、営業の要諦はターゲットの明確化です。今回、新幹線が来年3月14日に金沢に来ることもあるので、首都圏というターゲットを明確にしました。金沢の魅力、金沢の強みはなにか。先ほど言いましたように、工芸、クラフト。そこに厚み、深みを加えてくれるのが食文化。金沢の魅力発信拠点は、工芸と食文化に特化した形でオープンを致しました。銀座1丁目で、銀座の金沢という、そのままですけれども。そのままの名称、dining gallery銀座の金沢で調べていただければと思います。1回足を運んでいただければと思います。語弊があるかもしれませんが、ちょっと敷居を高くしました。やっぱり金沢のブランド、金沢の本物を感じていただきたいという思いでやらせていただきました。

ここCCNJで私が期待するものは、我々も皆さんから、いろんな刺激を受けたい。もしかしたら口幅ったい言い方ですけれども、金沢市から多くの自治体の皆さんも刺激を受けていただくかもしれない。そうやって、繰り返しになりますけれども、そこで化学反応が起きることによって、お互い付加価値をさらに高めていくことができればと思います。以上です。

太下氏:金沢山野市長、ありがとうございます。確かに、市町村レベルではアンテナショップの開設は非常に珍しい事例かと思えます。今、議論が中断していますが、いずれ日本が道州制に移行するとしたら、今東京にある、都道府県のアンテナショップが要らなくなるわけです。むしろ市レベルまたは地域レベルのアンテナショップがこれから必要になってくるのではないかと思います。今回の金沢市さんの事例は、その先駆けになるかもしれませんね。どうもありがとうございます。それでは続きまして、篠山市の酒井市長、ご紹介をお願いします。

酒井篠山市長:皆さん、こんにちは。兵庫県の篠山市です。篠山市と言っただけでは、なかなか全国的に通用しないですけど、丹波篠山と言っただけでおります。先ほど創造都市、創造農村というお話がありましたが、私の方は小さなまちです。人口が4万5000人ですから、創造農村のほうに当たると思います。中心にお城跡がありまして、周辺に農村集落とか山とか田んぼが広がる、そういったまちであります。全国的に有名なのは、黒豆であります。

この創造都市への取り組みのきっかけは、丹波篠山は山奥というイメージが強いけれども、実は大阪、神戸、京都まで、1時間の距離になります。今後どのようなまちづくりをしていくかというときに、今まででしたら、都会に近づける、都会と同じにしていく。こういった方向で、まちづくりに取り組んでこられたかと思うけれども、そうではなしに、この篠山らしい田んぼ、篠山らしい魅力を生かしたまちづくりをやっていこうと。その魅力とは何かというのは、農業であり、文化であり、まち並みである。こういったときに、この創造都市というネットワークのことを知りましたので、ご指導を得まして、ここに加盟をさせていただきました。ですから、先人が築かれた、その良さを、その魅力を発揮するまちづくりを活かして目指していこうと考えています。どのような取り組みをしているかにつきましては、1つは農業の面で農都宣言、農業の都・篠山市として宣言をしています。これからの農地、農村、この農業のブランドを守っていこう。もう1つは、この文化とまち並みをさらに伸ばしていこうということです。文化庁の重伝建、重要伝統的建造物の保存地区という歴史的なまち並みが、篠山は2ヶ所も選定をさせていただいておりますし、全国で年明け初めての元旦能「翁」というものもあったり、京文化の影響を受けた、パンフレットに載せておりますお祭りがあったりします。こういったもの大事にしていく。まち並み、これも景観計画を作ったり、土地利用計画を作ったり、広告物の規制をしたりして、この良い雰囲気や環境を常に保っていきたいと考えております。この6月には、これは自慢ですけど、国から都市景観大賞も頂きました。これを守るだけではなしに、創造性を発揮していくには、どうしたら良いだろうかということを検討しております、取り組みを始めているのが「まちなみアートフェスティバル」。まち並みとアート、つまり古いまち並みの中で現代アートを展示する、これをずっと3年続けてやっております。「食と器のビエンナーレ」、篠山市には丹波焼という焼き物があるのですが、そういった食器に丹波の食を盛る、こういった取組。それから、古民家を、地元の建築技術を生かして、そこに農家民宿、いろんなお店が入ったり、最近では、そういった取組を紹介していただき、観光で来て頂く方は確実に増えてきております。ですから、私が今、市民の皆さんにごあいさつで言っている言葉は、「世界の皆さん、こんにちは」、それだけで明るい気持ちになるのですが、私たちの魅力は世界的なものですよと、決して山奥の遅れた所ではありませんよと、そういったことで地域に誇りを持って暮らしていきたいと取り組んでいるところです。

太下氏:酒井市長、ありがとうございます。農の都と書いて「農都」という言葉は、非常にいいネーミングですね。篠山市の元副市長が代表をされている団体も同じ名前だったと思いますけれども、非常にいい取組ではないかと思っております。今TPPの議論も進められていますけれども、日本の農業がクリエイティブな産業であり、農業に携わるということが、実は輝かしい仕事だということをもっとPRしていく必要があるかと思っていますので、そうした取組の、ある意味で最先端をいっているのが篠山市ではないかと思っております。では、続きまして、奈良市の仲川市長のほうから、ご紹介をお願いします。

仲川奈良市長:ご紹介いただきました奈良市長、仲川でございます。登壇者の、もしかしたら参加者の中でも、一番若年の38歳でございますけれども、奈良の市長は、今5年目をさせていただいております。古い町のイメージが奈良にはあります、鹿と大仏というふうにも、よく表現されますけれども、奈良の持っている魅力や価値というものをいかに掘り起こしていくか、そして、また、光を浴びていくかという中で、創造都市ネットワークの考え方に共鳴を致しまして、参画をさせていただいております。また、2016年の東アジア文化都市事業に際しまして、国内の候補都市に先日選定をさせていただき、大変光栄であったと共に責任の重さも実感をしているところでございます。

今、申し上げましたように、奈良といえますと、非常に古い、特に奈良時代を中心とした価値に、どうしても注目が集まってしまいます。もちろん、これは非常に大きな価値がありますし、古都奈良の文化財が世界遺産登録から16年たっておりますけれども、これは非常に大きなものがあるのは、間違いのない事実だと思っています。ただ、それだけではないと私は思っています。1つには、奈良には、その文化を継承してきた、さまざまな技術や知恵、また想いというものがございます。ちょうど来年から、1年間かけまして、春日大社の式年造替が行われますけれども、これは伊勢神宮、また出雲大社などでも、今注目の取り組みでございますけれども、奈良の春日大社は、ほぼ20年に一度繰り返してきておりまして、今回は60回目ということで、20年掛ける60回イコール1200年続いている取組ですけれども、やはりこれを継承するためにも、技術の継承ということも非常に重要になっています。

先日、奈良で世界の文化財保護に関わる専門家の方が、一堂に会する会合がございまして、そこで20年前に採択をされた奈良文書という文書について、これからさらに、どう広げていくかという議論がなされました。その奈良文書といわれるものの、一番中心的な意味は、西洋の石の文化、つまり古いものを古いままに残っているということに価値を見いだすというところから、古いものを随時、人の手で、技術で修理保存しながら継承しているという、いわゆるアジア的な木の文化の価値というところに評価をしたというのが、20年前の奈良文書の大きな役割でございます。そういう意味では、奈良の中でも、大仏様も2度焼け、その度に再建をしておりますし、そのときには、為政者の大きな力だけではなくて、例えば、資材についても、港に『大仏行き』と書いて置いてある資材が、その道中行く人たちが、バトンタッチをして、リレーをして運んで、最後、東大寺まで、1つも物が失われずにきちっと届いたというようなこともございます。つまり、多くの人たちの、恐らく、何万という人たちの小さな力が寄せ集まって奈良の文化や歴史というのは、今日まで継承されているのではないかと考えています。

そういう意味では、鹿と大仏に非常に焦点の当たる奈良ですけれども、それ以外のところの価値を、いかに伝えていくかということが、この文化事業の中では、我々非常に重要視しているところでございます。特に、さまざまな文物のルールが奈良にはあるわけですが、実は知られてないものも多くございます。今年から始めた取組で、珠光茶会というお茶会があるけれども、これ、千利休の師匠の師匠であります村田珠光が、奈良に縁があり、その珠光が始めた、わび茶をしっかりと継承していこうということで、今取り組んでおりますし、清酒発祥の地というのも、奈良の正暦寺というお寺が、そのルーツだといわれています。また、能の発祥の地というのも知られているところでございますけれども、能舞台の大きな松の絵がございますが、あの影向の松も、今3代目だと思いますけれども、その松のそのものが残っております。また、芝居という言葉の語源も奈良の春日の芝生の上の舞という言葉が省略をされて芝

居という言葉になっているように、いろんな物事のルーツがあるのですが、このルーツというところをしっかりと次の世代につなげていく価値にしていきたいなと思っています。

実は、私、昨日中国西安から帰ってきました。韓国の慶州市、それから中国の西安市、そして日本の奈良市、3市姉妹都市でございますけれども、その3市の首長会談をした際にも、東アジアの緊張状態をどう乗り越えていくかということが大きな論点になりました。国家間のさまざまな状況は、都度変わるけれども、地方同士の取り組み、特に文化の取り組みには、それを乗り越える力があるということを確認し合いました。慶州市長の言葉を借りれば、川は常に右に左に曲がりくねりながら、いろんな障壁にぶつかるけれども、最後は大きな海に繋がっていくと、そういった視点を持って取り組んでいこうというお話がありました。奈良時代、思い起こしてみれば、何もない町に新しい国づくりの礎が築かれたわけで、特に世界各国から文化や芸能を柔軟に受け入れた。今風に言えば、ダイバーシティとインクルージョン、これが国づくりの元であったと思っています。奈良市がこれから、新しい文化都市事業をしていく際には、この2つのダイバーシティとインクルージョンということをしつかりとテーマに据えながら、さらなる新しい文化の継承にチャレンジをしていきたいなと、そんなふうに思っております。以上でございます。

太下氏:仲川市長、ありがとうございました。つい昨日、海外からお帰りになったばかりということですけれど、西安、慶州と奈良市という3つの世界遺産都市でのお話し合いの中で、まさに政治的には緊張関係にある東アジアですけれども、国と国との関係というのは難しさが伴うとしても、都市と都市との関係というのは、それとはまた別の交流がきつとできると思いますので、その意味でも、『東アジア文化都市』が非常に重要な取り組みになってくるのだと思います。奈良市さんは、2016年の東アジア文化都市の開催都市に内定されていますね。今年2014年が横浜市ですけれども、来年2015年が新潟市。2016年が奈良市。2017年が京都市と、こういうふうに先々内定しております。この「東アジア文化都市」の取組は、非常に重要な取組だと思いますので、ぜひ頑張ってくださいと思っています。今、4都市の市長さんを一巡して各都市のお取り組みをお伺いしたところです。もう一巡ぐらいをして、今後の取り組みのご予定であるとか、このCCNJの中での、ご活躍もお聞きしたいですが、その前に、コメントーターの熊倉先生にコメントをいただけますでしょうか。

熊倉氏:ありがとうございます。山野市長に伺いたいのですけれども、先ほども市長自らおっしゃっていましたが、この春、十数年ぶりに金沢を訪れまして、前に伺ったときと同じ町とは思えない賑わいで、まず、伝統的な保存地区が本当に、ただまち並みが残っているだけでなく、活用されて、まさにクラフトの現代的なデザインへの試みというのが、作り手と直結して出会えるようなお店が多数ございましたし、何より世界中からの観光客で溢れていて、京都だったら分かりますし、一部の国の外国人団体観光客の人が押し寄せているというのは見たことがあるけれども、何か特別に海外に向けて、観光プロモーションをしていらっしゃるのでしょうか。また何が魅力で外国人の方々が金沢にあんなに訪れていらっしゃるのか。また、金沢の21世紀美術館も遅まきながら、初めて伺って、中学生が庭でたくさん遊んでいて、ショップにも詰めかけていて、びっくりしたんですが、今のこの金沢のにぎわいに、先

ほどの佐々木先生のご講演にもありましたが、やはり21世紀美術館も何か役割を果たしているのでしょうか。

山野市長:アートが、文化が、まちを元気にするっていうということは、ここにいらっしゃる皆さんは一般論としてご理解いただけると思いますが、それをすごく分かりやすく実証したのが、間違いなく金沢21世紀美術館であると強く思っています。子どもたちの話をさせていただきましたけれども、これはやっぱり蓑豊初代館長のアイデアで、まずは、とにかく子どもたちに1回美術館に足を運んでもらえる仕組みを作ってくれということで、オープンしたその年は、小学校1年生から6年生まで全小学校、美術館に招待をいたしました。バスをチャーターして、予算が4000万掛かったそうです。蓑豊館長は、当時の山出市長に、「これが認められなかったら、俺は辞める」と言うくらい強い姿勢で、まずは美術館に、とにかく、分かって分からなくても足を運んでもらう、美術館に足を運んだっていう実体験が大事だということで、されました。さすがに、2年目以降は、予算の関係もありますので、小学校4年生は全員、21世紀美術館に足を運んでもらうという形にしました。足を運んでいただいた方、お分かりになるかと思いますが、普通、美術館とか博物館は、静寂な中で鎮座します美術館、博物館が一般的だと思いますけれども、21世紀美術館の、いわゆるフリーゾーンは、子どもたちが走っても平気なんです。走っても、誰も怒らない。僕は、ちょっと知的な遊園地という表現で、よく言っていますが、そのちょっと知的な遊園地のあるおかげで、若いお父さんやお母さんが子どもたちを連れて、美術館に行く。何をするっていうわけではなくて、美術館に来るようになってきますし、そういう方たちが近隣でお買い物もしてくれるようになりました。噂が噂を呼ぶという大変典型的なパターンでして、1年目に無料ゾーン含めて100万人の方が来てくれました。新聞やテレビで大きく、大げさに言えば世界中の新聞やテレビ、雑誌で、美術館冬の時代といわれているこの時代に1年目から100万人来たということが大きく報道された。大きく報道された、じゃあ行ってみようかなということで、さらにたくさんの方が来てくれました。また、蓑館長から引き継いだ秋元館長もその期待に応えるべく、学芸員の皆さんもアイデアを練りながら、さまざまな企画をすることによって、今でもたくさんの方が来てくれていますが、間違いなくまちが元気になったと思っています。21世紀美術館の力は大変大きいと思っています。ただ、我々は、21世紀美術館だけに、あぐらをかいているわけにはいきません。

先ほどから同じ表現で言っていますが、やはり21世紀美術館も、我々金沢というまち自体も常に刺激を受けなければいけませんから、おっしゃっていただいたように世界に向けて情報を発信するよう意識しています。いろんな雑誌で記事にさせていただいたら、金沢市は東京に事務所がありますから、可能な限りその出版社にお礼に行くように言っています。特集を組んでいただいた出版社には、僕が東京へ来た際に直接お礼に行って新たな売り込みをすることによって、さらに扱ってもらうようにしていますし、海外から著明な雑誌の編集の方をご招待し、取材をしていただいて扱ってもらうようにもしています。これが、ここ数年間、少しずつ形になってきているのではないかなと思いますし、引き続き、していかななくてはならないと思っていますし、銀座の金沢で新たに、魅力を発信していければと思います。

太下氏:それでは、引き続きまして、お集まりいただいた4都市の市長の皆さんに、今までの各都市の取り組みとか、各都市の文化資産の状況をお話いただきました。そして、今後、東アジア文化都市も毎年続きますし、2020年にはオリンピックも開催されます。このオリンピックの文化プログラムは2016年から始まりますし、さらにアジアを中心とした国際交流の重要性など、今後どういう展開をお考えなのか、といったことについて、先ほどと同じ順番で、お伺いしてまいりたいと思います。ではまた鶴岡市の榎本市長お願い致します。

榎本市長:まずは、国内的には、共にユネスコの食文化に申請をしております、お隣の新潟県新潟市さんと同じ思いを持つ都市として連携をとっていきたいと思っています。と申し上げますのも、農林水産業であったり、あるいは酒づくりであったり、同じような基盤を持っております。また、羽越本線を通して、新潟さんから見ると、私ども小さな都市ですけれども、きらきら羽越観光圏ということで、常にご指導いただいているところでもありますので、今後とも一緒になって取り組めればと思います。また、来年の10月に開催されますミラノ万博には、新潟市さんと一緒になりまして出店をし、日本の食文化をPRしていきたいなと思っています。また、本日同じように、このステージに上がっております兵庫県の篠山市さんには、歴史まちづくりの観点から、一般社団法人のノオトの金野さんにご指導をいただいています。指導いただいているのは、明治大正時代、養蚕で一大産地になったことがあります、松ヶ岡地域です。その産出群を何とか、これから、歴史遺産あるいはまちづくりとして取り組んでいるところでもあります。とりわけ、私どもの市は、養蚕、生糸、精練、染色、捺染の五つの工程がいまだに残っている全国でも唯一の所になっておりますので、全国の絹に関わる地域の皆さんとシルクサミットということで、絹をもう一度細々でも取り組んでいければと思っていますところでもあります。

また、我々は食文化でありますので、東アジアのことを考えれば、今年度のユネスコの世界のネットワークの会議が開かれた中国の成都市、そして韓国の清州市と併せて、東アジアの中で食文化を通して連携を取っていければと思っています。もちろん、食文化以外でも、鶴岡は歴史小説家の藤沢周平先生の誕生の地でありますし、皆さんご覧になったかもしれませんが、『おくりびと』が撮影された地としても、いまだに野外スタジオを持っておりますので、そんなことを通しながら、食文化以外の地域の皆さんとも、このCCNJを通して、ぜひ、連携を取りながら、共に高め合ってまいりたいと思っていますので、どうぞよろしくお願い致します。以上です。

太下氏:ありがとうございました。今、新潟市さんとの連携のお話ありました。鶴岡市さんと新潟市さんは同じCCNJのネットワークのメンバーになりますが、共に、今ユネスコの創造都市ネットワークの食文化都市の分野で申請中です。両都市揃って同時認定されと良いと思います。世界的に見て、食文化都市が比較的近接して2カ所ある所は他にはないのですね。もし認定されると、食という魅力あるコンテンツで、相当なインバウンド観光の需要が引き出せるのではないかと考えています。そういう意味でも、来年の10月のミラノ万博で2都市が共同出展する。極めて変わった形の出展形態だと思いますけれども、いいPRの機会になるのかなと私は思っております。ありがとうございました。続きまして、金沢市の山野市長のほうから、今後の展望のお話をお願い致します。

山野市長: さっき長く喋ったので、箇条書きで幾つか申し上げたいと思います。まず、先ほどお話しした21世紀美術館、今年で10周年を迎えました。10周年にあたりまして秋元館長が明確におっしゃったことは、中国、韓国、台湾と共同で展覧会を行っていきたい。10周年を迎えて、これからの1つの大きな目標にしていきたいとおっしゃられました。まさに、今日のテーマにぴったりの考え方だと思っておりますし、全面的にバックアップをしながら、21世紀美術館を核にしながら、東アジアの文化のハブになると言ったら、少し生意気かもしれませんが、そのために、しっかりとやっていきたいと思っております。

2つ目、長官が6月に石川県にお越しいただきまして、ご講演をいただきました。そのときに、2020年には、石川県と富山県で工芸サミットをとおっしゃっていただきました。私も、大変嬉しく感じましたし、知事も全く同じ思いだと思っております。金沢市と致しまして、石川県とも連携をし、富山県とも連携をし、文化庁のご支持をいただきながら、2020年の工芸サミットを、しっかりと取り組んでいきたいと思っておりますし、その前にプレ大会なり、いろいろなものが必要になってくると思っておりますので、そのことにつきましても、連携をしながら対応していくことによって、あらためて、工芸のクラフトの金沢ということをし、しっかりと世界に発信をしていければと思っております。

3つ目は、これも先ほど、クリエイティブ・ワルツ、人材を育てていく付加装置として卯辰山工芸工房のお話をしました。できたのは、平成元年でしたけども、実は30周年に向けて、リニューアルを考えようとしています。コンセプトはもう明確です。明確に決めています。そこで学んだ方たちが、世界で活躍する。世界に発信できる人材を育てていきたい。世界中から多くの優秀な人材を引き付けることができるような付加装置を作っていきたいという、その思いで、30周年にはリニューアルオープンにこぎ着けたいと思っております。そこが間違いなく新しい、これも少し生意気な表現かもしれませんが、日本の世界の工芸作家、アーティストの付加の装置になっていけばという心意気で取り組んでいければと思っております。

もう1つは、これもしつこいのですけれども、昨日オープンしました銀座の金沢から、首都圏だけではなくて首都圏から世界中に金沢の魅力を発信していけるように、さらに磨きをかけていきたいと思っております。文化庁で文化芸術立国中期プランを作っていただきましたので、我々としましては、それをしっかりと受けて、連携をしていながら、2020年のオリンピック、パラリンピックに向けて、しっかりと文化プログラムを作っていければと考えています。以上です。

太下氏: ありがとうございます。実は日本人が思っているほど、きれいな絵皿というものは海外では売れないらしいですね。それは理由があって、やっぱり食文化の違いで、西洋では基本的にソースを使った料理が多いので、食べた後はお皿が汚くなる。だから、皿はすぐ片付けるものという文化なのですね。日本は、あっさりとした調理が主ですから、食べた後も、お皿を愛でるといった深い文化が育まれたのです。皿という文化を欧米に持っていく上でも、もっと深い文化の浸透から持っていけないと、なかなか、いけないのかなと思っております。一方で、2020年に向けてビジット・ジャパン・キャンペーンで、海外からの観光客が現状の1000万人から倍の2000万人にするということですから、日本でそういう独自の文化を味わっていただけると、もっと、海外への方のイメージも変わっていくのかと思っております。それでは、続きまして、篠山市の酒井市長、今後の展望、お願い致します。

酒井市長:この創造都市ネットワークに入って、大変良かったと思っております。このように国内のそうそうたるまちの皆さんと一緒にさせていただけるということ。それから、私のほうも、この3月にユネスコの登録申請をしています。世界のいろんなまちと一緒にやっていけるというのは、大きな誇りと思っています。ただ、課題は、市民の皆さんに、こういった取り組みが理解されているかということ、なかなか創造都市、創造農村といいますが、なんのことか分からない、パッと聞いて分かりません。ですから、私は、そうぞうしい都市だ、やかましいということで、明るく元気な農村だと、言っている。こういった理解を深めることが大切です。

それから、私たちのように小さな都市、そういった所の自治体の共通の悩みは、やはり人口が減っていているということ。将来、消滅するかもしれないというようなことが言われる中、これから、どのように、このまちを維持していくかということですが、私はこういった取り組みが、これから、どんどん都市に集中するのではなく、魅力ある市に、みんなが住みたいという、大きな何かきっかけになるんじゃないかということで期待をして進めたいと思っています。やはり、農業、文化、建築技能と、こういいますが、それが直ちに、皆さんがそれによって生活していけることと結び付けられるかということ、全体的には、なかなか難しいところがありますので、今日のご講演に創造産業、こういったお話がありましたけれども、いかに結び付けていけるかというのが、私のほうの今後との課題だと思っております。そういったところへ取り組んでいきたいと思っています。以上です。

太下氏:確かに、クリエイティブ産業というのも大事な要素になってくるのだと思います。クリエイティブな産業によって、地域が輝くわけです。そのことによって、都市や地域も持続可能性が増していくと、こういう、いい循環ができればいいと思っています。ぜひ、篠山市さんはじめ、このネットワークに入ってらっしゃる自治体のみなさんが、お手本というとおがましいですけど、そういう姿勢を示していくことで、日本全体が盛り上がっていく、そういうようなムーブメントになればいいかと思っております。それでは、お待たせしました。奈良市の仲川市長、今後の展望のご紹介をお願い致します。

仲川市長:私は2つあります。1つは、世界の中の奈良、もしくは世界の中の日本ということ強く意識をした取り組みをしていきたいと思っています。日本は島国っていうふうに、よく言われますけれども、例えば分かり易くいいますと、今、奈良は外国人の観光客が非常に増えています。その話だけを聞いていいますと、日本だけが観光がはやっているように見えるけれども、実は、例えば中国人の観光客であれば、韓国の伸び率のほうが圧倒的に多いわけです。日本の事情だけ、日本の状況だけを見て、「いやあ、最近こうだ」というふうな理解をしがちですが、世界の中で日本が、今どういう状況にあるのかという立ち位置、ドメインというのをしっかり認識をして、取り組みをしていく必要があるのかなと思っています。文化のところ、その話を少し繋げて申しあげれば、例えば奈良の中もそうですし、日本の中には、アジアやシルクロード、各国のいろんな文化・文明が溶け込んで、もう既に内在しているという状況があります。これが非常に文化的にも価値のあるものだと思います。現地の国、オリジナルの国には、既にもう消滅してしまったような文化や芸能、そういったものが、多分に日本の中には残されている。これをわが国としての、大きな価値として、もっと活用していくべきではないかと思っています。

ます。ちょうど2020年にオリンピックございますけれども、2016年はスポーツ文化ダボス。世界中の文化人、スポーツ関係者が一堂に日本にというようなことを政府もおっしゃっておりますので、そういう動きとも連携をしながら、対日本文化の価値というだけにとどまらずに、世界の中で、どういう立ち位置を持っているかということ意識して、特に奈良としては、取り組みをしていきたいと思っています。

もう1つは、地方発ということの重要性だと思っています。今回の東アジア文化都市事業は、これは文化庁さんの取り組みで、国家プロジェクトという非常に大きな位置付けになっております。一方で奈良市をはじめ、候補に手を挙げているのは、地方の自治体。この地方の発意、地方の創意工夫というところで、この東アジア文化都市事業が広く展開されていくということに、私は大きな可能性があると思っています。国や学識の方がお墨付きを与えるという形の文化の認証ということではなくて、今までになかったものも含めて、新しいものを共に作っていきこうという地方の取り組み、それから、その地方同士のネットワーク、こういったものが新しい切り口を切り開いていくチャンスになるのではないかなと思っています。以上です。

太下氏:仲川市長、ありがとうございます。今、正倉院のお話がありましたけど、これは非常に象徴的ですね。ある意味、アジア全体の文化のアーカイブが、あの正倉院にあるということではないかと思えます。今、文化庁のほうでもアーカイブの重要性というのは非常に議論されているところですし、日本のナショナルアーカイブみたいなものも必要じゃないかという議論がありますけども、ぜひ、2020年に向けての期間に、そういったアーカイブという文化を継承するという、そういったセンターも併せて整備されたらいいなと思えます。最後に総括的なコメントを、熊倉さんのほうから何かございますか。

熊倉氏:首長さんが並ばれて、こんなに深い文化の話ができる日が、私の目の黒いうちに来るなんて、感慨無量でございます。本当につい一昔前は、あまり首長さんは文化のことは語りたがらない、非常にステレオタイプな文化観を述べられることが多かったのですが、やはりそれだけ地域の資源をどう掘り起こすかというときに、文化という視点はやはり、大事だなというふうに感じました。1つだけ1回目の1巡目のときに、仲川市長がおっしゃいましたが、名もなき人々の参画ということが成功には非常に重要ではないかと思っています。太下さんとも、ご一緒させていただいておりますが、文化庁の文化審議会、文化政策部会のほうで、先週の部会で萩市長がお見えになられて、日光江戸村の営業も受けただけでも、あれにくみしなくて良かったと。なかなかまち並み保存ということで、市民コンセンサスを得ていくのは当初、非常に難しかった。しかしながら、自らの手で行うことが、非常に意義があったと思うというふうにおっしゃっていたのが印象的でした。

最後に1つ本の宣伝させていただいてもいいですか。『「地元」の文化力』というので、これはサントリー文化財団さんが、もう何十年も前から、サントリー地域文化賞という賞を出していらっやいます。その文化財団の研究会へ私も参加させていただいて、そのサントリー地域文化賞を受賞するようなユニークな文化活動がある町が、果たしてIターンやUターンへ何か関係があるのかということで、私は参加させていただいております茨城県取手市のことを書いているのですが、私の文はともかく、この文化が人々の地域へのロイヤリティに関係があるかもしれないという初めての社会学的な統計調査が、最後の章で大阪大学の吉川先生と、その研究室によって行われていて、非常に示唆に富む研究だと思えます

のでこちらにいらっしゃる方々にも、「文化だ」と言うときに一つの武器になればと思って、ご紹介させていただきました。

太下氏:ありがとうございました。そうこうしているうちに予定の時間が過ぎておりました。控室で打ち合わせのときは、そんなに喋ることあるかなとかおっしゃっていた首長さんもいたのですが、やっぱり政治家の方は喋りだすと、止まらないところもありまして、すっかり予定の時間をオーバーしましたが、これで第1セッションのほうは、終わりにさせていただきたいと思います。皆さん、どうもご清聴ありがとうございました。

テーマⅡ 現代の文化芸術の国際発信

上田文雄札幌市長、関口芳史十日町市長、門川大作京都市長、林文子横浜市長

進行/東京藝術大学 熊倉純子氏

コメンテーター/三菱UFJリサーチ&コンサルティング 太下義之氏

熊倉氏:それでは、サブテーマ2、現在の文化芸術の国際発信ということで、お集まりいただきました。こちらのセッションでは、ぜひオリンピック、パラリンピックについての期待なども、後ほど伺ってみたいと思います。基調講演をなさった佐々木先生は、いつも日本の創造都市に非常に重要な案件として、コンテンポラリーアートという要素を挙げていらっしゃいます。今回こちらにお越しいただきました自治体では、それぞれ大型の現代芸術祭を開催するという共通点がございまして。既に何度も開催されている、あるいは今年初めて開催、来春に開催ご予約のところもございまして。どれも億というお金が掛かっている大規模なもので、何だか急に現代アートが盛んな国になったような気がして、現代アートファンも非常に増えました。1990年代には、まだ「難解な」という枕言葉ついていた現代美術ですけど、十日町市を中心とする越後妻有アートトリエンナーレに毎回30万から40万の人々が押し寄せる。どこの都市も、あるいはどこの地域もアートプロジェクトをやらなくちゃと、さまざまな形のアートプロジェクトが、さまざまな形で行われています。現代美術の大衆化が進んでいるとはいえ、大型の芸術祭を開催するというのは、首長さんとしては、結構大きなご決断ではないかと思うんですけども、まずは、その辺りから、皆さんに伺っていかうかと思います。上田市長、1回目、素晴らしい展覧会でした。でも、札幌の若いスタッフの方々は、「いやいや、札幌では、まだこういうのなじみがなくて」とおっしゃっていましたが、市民の反応などいかがでしたか。

上田札幌市長:実行委員会のスタッフたちの反省会を、今しっかり進めているところです。一番大事なのは、市民が何を感じるかということです。アートはアーティスト芸術家、あるいはクリエイターのためにあるわけじゃなくて、その表現の対象が、どのように感じ、何を持ち帰ったか、そして、それを内省化して、どう自分の生き方に反映することができるのかできないのか、そこら辺が一番大事なところだと私は思っております。特に行政が、これをやるというからには、そのことが検証されなければ、うまくいったのか、そうでなかったのかというようなことも、成否というものは付けられないだろうとい

うふうには思っております。私ども、第1回目で、かつ、先ほどおっしゃいましたように、難解な現代アートというイメージが非常に強い分野について取り組もうとしたわけでありますので、初めは30万人ぐらいという想定をして始めたところでありますが、数こそ48万人近くになり、予想に反して多くの方々においでいただいている。そして、表層的なアンケートでありますけれども、ほとんど4分の3ぐらいの方々は、とても良かった、良かった、また来たいというふうに言っていただいております。その、良かった、そうじゃなかったという、その内容が、これからいろいろな方々を通じまして、もっと深い感想を頂戴しながら取り組みもさらに進めていきたいと思っております。

札幌は、なぜこれを始めたのかということをお話をさせていただいていいですか。創造都市さっぽろという宣言を2006年に致しました。そして、2009年に、この創造都市さっぽろを推進するために、どんなことをするのか、というようなことで、まだ、この芸術祭も一つの課題ということで、取り組みを始めたところでありまして。2014年、今年にそれが成立したというわけであります。創造都市という言葉も分かりにくい、と先ほどの酒井市長はそうぞうしいものだぞと、とにかく賑やかになるものだ、というようなお話だったと思いますが、そういう側面もあると思います。私どもの札幌、私たちが心の支えにしているのは何なのか。非常に自然条件の厳しい北海道という所で、145年生活をしてきて、大都市を建設してきた。その札幌人が、あるいは、北海道人の精神的な基調って何なのかと考えたときに、それを一つ誇りに思えるのは、Boys, be ambitiousという開拓者精神であったり、あるいは、1972年、今日のテーマでもありますけれども、冬季オリンピックがアジアで初めて開かれたのは札幌だと。それを成功させることができたという市民の誇り。こういったものが札幌人、北海道人の、冬を耐え、そして、そこから新しいものを作っていくことに挑戦できる人間として、われわれ居るんだという思いではなかったかなと思います。ただ、クラークさんが札幌から去られて百四十何年、さらには冬季オリンピックが1972年ですから、もう四十何年経過をしております。直接体験した人が、だんだん少なくなってくるという状況の中で、われわれの精神的な誇りだとか帰属意識だとか連帯感だとか、それを何か持ってくるのは、新たに作らなきゃいけないのではないかと思っております。

それと、もう一つは、まちづくりにおける市民自治ですね。行政から何かやってもらう。あるいは、税金さえ納めていれば、何でもやってくれるはずだということではもう済まない少子高齢社会が到来しているわけであります。そこにおいて、やっぱり横の連帯だとか、帰属意識だとか、そういうことってというのは、ものすごく大事なまちづくりの要素になってまいります。それと市民自治システムを入れますと、自分のことは自分でやる。そして、それをいかに快適にするか。そして、そのことが、何の苦にもならない、楽しくやれる。それは、創造的に物を考える。そういう習慣を私たちは付けていかないといけない、というような思いと重ね合わせまして、創造都市ということが、市民一人一人が創意工夫に満ちた生活をし、産業を興し、そして文化を起す。そういう主体になっているんだという思いで、今、創造都市というものを作り上げていこうとしています。その発展形式として、我々が実践していることが、独りよがりのものではないと時々チェックを入れる。それは国際性との比較、他都市との連携、こういったことです。そんな意味で国際芸術祭に初めて取り組みましたけれども、世界的な評価を受けておられる方々の表現の方法、あるいは、物事の視点、こういったものが展開される国際芸術祭を札幌でやれたということ、それを観賞する機会を得たことは、地元の芸術家にとっても、われわれの札幌市

にとっても、とてもいいチャンスであったし、また、こうして、創造都市ネットワーク日本の皆さん方と一緒に、物を考えることができるチャンスを頂けたということも、大変嬉しく思っております。

熊倉氏:ありがとうございました。十日町市の関口市長、「大地の芸術祭」は火付け役といたしますか、老舗といたしますか、しかし、最初の頃は、訳分かんないなっていう感じだったんじゃないかと思えますけれども、12年ぐらいを振り返っていかがでしょうか。

関口十日町市長:新潟県十日町市の市長の関口でございます。今ほど、お話を頂戴したわけですけど、2000年から越後妻有、大地の芸術祭を始めております。ただ、そのときは、多分新潟県の合併推進のための地域おこしの一つの施策だったんだと思うんです。新潟県内で幾つかのエリアに、やらないかと声が掛かったと伺っています。ところが、幾つか手は挙がったのだけれども、形になったのは、越後妻有だけということでありました。2000年に第1回展をやりまして、その当時は、将来合併構想が県のほうで決まっていたモデルの6市町村が一緒になって、同じチャレンジをしようと。そういう中で、仲良くなって、うまく合併しようということだったと思います。結果は、五つオッケーで、一つ脱落しまして、今、十日町市と津南町と1市1町で越後妻有をやらせていただいております。東京23区よりも広いエリアの中に、300ほどの作品が点在しているということでございます。私も実際回りますし、友人やお客さまなどを、ご案内するわけですが、子どもなどを連れていきますと、本当にもう疲れたと、まいったと、暑いと、そんなことを、よく伺うんですけども、その作品に行くまでの所で何か発見してもらったら、嬉しいなど、いつも思っています。越後妻有には、星峠の棚田ですとか、非常に農業と格闘した歴史的な、まさに産業遺産が残っていますが、その棚田に行き着くまでに時間がかかるんですけども、棚田の先に、実は作品が置いてあるんですね。それが、やっぱり作家の狙いなんだと思うんですよ。訪ねてきて、この作品目当てに来てくれたら、そこに何か面白いものが待ってますよと。もっと言えば、もっと見ていただきたいものが、そこにありますよといったものの集積が越後妻有じゃないかと思っています。

いろんな若者が、どんどん入り込んで来ています。外国の作家さんも来られます。そして、今、100ほどの集落が、この越後妻有の作品展示に関わってくれていますけど、ご案内のとおり、みんな高齢化集落なんですよ。そこのお年寄りが、大学生の女子学生などに、「おじいちゃん、すごい技持ってるね」とか、「意外に力強いね」とか言われながら頑張っていて、作品制作に関わっていく中で、少しずつ自信を付けてきた、この12年間ですか、もう歴史なんじゃないかなと、こんなふうに見ております。

熊倉氏:ありがとうございました。私、4回目のときでしたか、十日町市の仙田保育園で、学生たちと合宿し、活動発表をさせていただきました。下見の時から、集落のおばあちゃんが「芸術祭ですか。ご苦労さまです」って言ってくださって、びっくりしましたし、オープン初日に最初に私どもの発表会場に訪れた年配の男性のお客さまは、村上市から楽しみにいらっしゃったそうで、ちょっと話し掛けて、「これをやっている芸術大学の者です」って言ったら、即座に「それはありがとうございます」って言われました。地域の方にありがとうございますって言われたのは初めてで、いつもアートなんか邪魔だと言われていたのに、なんという変わりよう。また、どこの作品を訪ねても、その集落の方がニコニコ

といろいろエピソードを語ってくださって、まさに、「我が作品」というふうにして来訪者が来るのを待ち構えている。私は、越後妻有は、その体験が一番面白いと思っておりまして、大型祭でありながら市民参加型に育っていて、うらやましいなと思います。

所変わって、京都でございますが。門川市長、京都でも現代芸術祭というのをやるんですか。京都は要らんだろうと、みんな思っているんじゃないかと思うんですけど、なぜ、現代芸術祭なのでしょう。

門川京都市長: 来年初めて、京都国際現代芸術祭という名においてやるわけですけど。似たような芸術祭が、いろんな所でやられていたんですね。京都の町って本当に1000年を超えて文化芸術創造都市であり続けた。来年限派400年ですから、400年前の現代芸術でしょうね。文化芸術、常に伝統を大切にしながら、新たな挑戦を繰り返してきたまちです。それで、兼ねてから、「現代芸術祭やりたい」「やろう、やろう」、と、まあ大体、お酒飲んだときに盛り上がるんですね。そして、各人しーんとしてくると。芸術系大学でも、京都市立芸術大学から京都造形、光華、精華、嵯峨芸、等々、五つ、六つ、もっとあるかな、こういうまちですから、誰が中心になるか、どういうコンセプトとするのだ。なかなか一つのコンセプトで京都のまちが一丸となってやれるということが非常に難しかった。しかし、やはり、やりたい。とりわけ、京都市立芸術大学でも、伝統的には日本画ですけども、今、世界に評価されている作家というのは、現代アートですね。そういうことを含めて、もう一度やろうと。こういうことをしていくのが、新たな挑戦していくのが、京都のまちの本質である。横浜さん素晴らしいな、十日町さん素晴らしいな、札幌さん素晴らしいなと思いつつ、そうした都市の先進性に学び、しっかりと横の繋がりを大事にしてやっていきたいなと思います。同時に、京都に伝わる、この日本の伝統とか文化ということも大事にしていかなければいけないと、このように思っております。今、棚田の話がありました。京都も日本の百景の一つに選ばれた棚田なんです。意外と知られてへんですね。京都の町で、ものすごく広いんですね。限界集落もいっぱい。京都は市内の75パーセントが森なんです。左京区なんか、大阪市より広い。こういう所ですので、意外な農家の現代アートも、山の現代アートもできるなと思って、皆さんと学びながら、同時に京都の独自性も発揮して、世界に開かれた取り組みしていきたいなと思います。

熊倉氏: 林市長、お待たせいたしました。横浜トリエンナーレが間もなく閉幕でございますけれども、私もつい先週でしたか、拝見させていただいて。平日でしたけれども、人がたくさん入ってまして、若い人たちでにぎわっておりました。森村泰昌さんという日本が世界に誇るアーティストの視点から、現代における芸術の神髄とは何か、社会との関わりとは何かということ、実に端的に、非常にユニークに描き出していて、大変見ごたえのある展覧会でした。そして、横浜美術館の最後の展示室に、冒頭の佐々木先生のお話にもありました、釜ヶ崎のおっちゃんたちが書いたお習字などが並んでいました。ジョン・ケージやマレーピッチといった現代芸術の始祖の作品から始まった展示が、釜ヶ崎のおっちゃんたちの表現へつながっている。果たして21世紀の芸術家とは誰ぞやという大きな哲学的な問いを投げ掛けてくれるようなレベルの高い展覧会でした。札幌の坂本龍一さんの「都市と自然」というテーマに真っ向から大真面目に取り組んだ展覧会と並んで、単に現代アートの国際的スターたちが並ぶ大型国際芸術祭にとどまらぬ、内容の濃い展覧会がこのような大きな規模で開催され、老若男女が楽しんでいるのを拝見して、日本もようやく本格的に現代芸術を受け入れる素地ができたのかと、嬉しかったのです。

が、いかがでしょうか。もちろん、一般の市民のかたがたには、決して易しい内容ではなかったと思いますが。

林横浜市長:ありがとうございます。今、ご紹介してくださったとおりの状態が、今回の横浜トリエンナーレでございました。ちょっと遡ったお話をいたしますけど、今回で横浜市は5回目ですので、歴史的にはかなり長いと思います。私が2009年に市長職に就かせていただき、最初に取り組んだのが、2011年のトリエンナーレでございました。

ご承知のように、横浜市は、1859年に開港しました。昔の横浜市のいろいろな写真などを見ておきますと、東京に伍するぐらい文化芸術が盛んでした。特に、伊勢佐木町辺りには芝居小屋がたくさんありました。江戸には市村座や中村座などの芝居小屋があったんですが、横浜市にもたくさんございました。今は全くそういうものはありません。これには残念ながら、関東大震災や横浜大空襲、そして、敗戦、終戦後には接収されて、なかなか返還されない。重要な経済拠点となるような所も接収されてしまい、返還が遅れたというような事情がございます。ですから、横浜というのは、東京に隣接しているけれど、経済的には厳しい環境でしたので、創造都市の取り組みを、とても一生懸命やってきました。

今、みなとみらい21地区には、非常にいろいろなビルも建っておりますけど、150年前の横浜は半農半漁の100戸の大変貧しい村でした。開港後、いろいろな苦難を乗り越えて、現在は370万人の都市になりました。日本初の近代水道をはじめ、まちづくりの高い技術もありますし、思いもあります。ですから、クリエイティブ・シティということで、トリエンナーレをいち早く取り組んできたことは、非常に意味があったと思います。

さて、先ほどご紹介いただきましたが、今回のトリエンナーレは、私は素晴らしいと思っているんですが、やはり、かなりの方にとっては難し過ぎて分からない。音声ガイドを聞いていただくと分かるんですけども、何もなお歩きになっていると分からないということは、確かにあると思います。

2011年のときに、「トリエンナーレはつまらない」「何をやってるか分からない。」「暑い。まちを歩くのが嫌になっちゃう」というご意見を、一部の方からいただきました。そこで、小さいお子さんから高齢の方まで、ワクワクするような楽しいトリエンナーレをやりたいということで、そういうところはかなり力を入れました。その結果、2011年の第4回のトリエンナーレは大変に評判が良かったんです。皆さん、家族連れで来ていただき、過去最高のお客さまが来られたと思います。

一方、今度の展覧会は、そういう風には言っていない。しかし、私はオープニングの際に展示を見て、素晴らしくて、非常に感動したんです。こういった現代アートを通じて、世の中にはこういうふう考えて生きている人が居るということを知ってもらわなくちゃいけない。現代アートは非日常的です。「えっ。こんなふうには物事を捉えるんだ」という、発見と驚きの短い旅なわけです。

今回は、(アーティストック・ディレクターの)森村(泰昌)さんの最高傑作じゃないかと思えるほど、森村さんの世界に他ならない。いわゆる玄人筋からウケている。一般の方には、「難しいな」という方もいらっしゃる。でも、私は、このトリエンナーレは、そういうことでいいだろうと思っています。ただ、行政が展開しておりますので、税金も投入していますし、国にもご支援いただいていますから、結果を出さなくてははいけない。入場者数もいろいろと評価されます。それでも、やり続けなくてははいけないと思います。

今回も、学生さんは多いです。小中学校をはじめ、修学旅行でもおいでいただいています。当然、「わからない」「つまらない」と言う方もいらっしゃる。でも、あえて本格的な展覧会を見ていただき、このトリエンナーレを物事を深く考えるきっかけとしていただき、芸術家の素晴らしさや、こういう現代アートに取り組んでくれる人たちの大切さ、リスペクト、そういうものを3年に一度、感じていただきたいと思います。

横浜市はクリエイティブ・シティということで、まちづくりや景観を非常に重視しています。夜景の美しさもプライドにしています。今、スマートイルミネーションをやっておりまして、船からご覧になると、非常に美しいと思います。一方、「夜景が美しくても、人は繰り返し来てくれない。心を動かすものは何だろう。それは、ワクワクして楽しいものだ。」ということで、私は、横浜芸術アクション事業というものを起こしました。来年は「Dance Dance Dance @ YOKOHAMA」というイベントを予定しています。横浜の街そのものを舞台に、オールジャンルのダンスプログラムを行う、ダンスの祭典です。2012年にもやらせていただきました。去年は、あらゆるジャンルの音楽を市内の様々な会場で演奏する「横浜音祭り2013」を行いました。ですから、今年はトリエンナーレで現代アート、その次にダンス、その次に音楽をやる。(Dance Dance Danceのような)市民の皆さまと一緒に踊っていただくというものもあれば、(トリエンナーレのような)尖がった、突き刺さるような、心を揺さぶるような、そういう思いもしていただく。そんな気持ちで、今、やっております。11月3日はフィナーレでございます。何とぞトリエンナーレにお越しいただきたいと思います。ありがとうございます。

熊倉氏:とんがった表現に対する政治のトレランスがすごく上がっている気がして、頼もしい気が致します。太下さん、いかがでしょうか。ぜひ、コメントをいただければと思います。

太下氏:実は私も現代美術は大好きで、大抵のトリエンナーレやビエンナーレを見に行っているのですが、今、日本ですごい状況になっていますね。熊倉さんもお話しになったとおり、全国でビエンナーレやトリエンナーレみたいなものを数えていくと、軽く100以上の数になります。こんな国は、世界中に日本のほかには多分ないです。なんで日本人は、こんなに現代美術好きになってしまったのかと思うほど、すごい状況です。ある意味、現代芸術祭が祭り状態という状況にあります。これはすごく日本的で特殊な状況ではないかと思っております。現代芸術と市民との関係についても、多分、西洋で行われているドクメンタとかヴェネチア・ビエンナーレなどとは、多分違うのですね。

今日お越しになっている越後妻有の大地の芸術祭が典型的な事例かもしれませんが、集落の方々が自ら芸術祭の運営にまで関わっているところが大きな特徴だと思います。たとえば、作品を作る部分に参加したりとか。また、つづら折りの道で、ツアー・バスが通れない所については、集落の方々が総出で案内してくださって、そのことによって見学ツアーが成立していたりとか、ものすごい状況になってるわけです。これがすごく日本的な状況だと思うのですよね。もともと日本人と文化との関わり方を考えてみると、一部のエリート層がハイカルチャーを担っているというだけではないのですね。たとえば、俳句や連歌もそうですし、盆栽とか書道とか、さまざまな習い事、お稽古事として、今、残っている文化もそうですけど、プロとアマとが混在一体となって、みんなが楽しんでいるという状況が日本の文化の大きな特徴です。そして、それらの文化を楽しんでいる限りにおいて、あまりプロとアマのしき

いがないような、そういう楽しみ方を日本ではずっとしてきたのですね。もしかしたら、そのような日本的な文化の楽しみ方の型に、今、現代芸術はすっぽりとはまりつつあるのかもしれないと感じています。

一方で、それに対して、今回の横浜トリエンナーレに対する評価というものは、「面白いのだけど、難しい」という感じが多いですよ。これはまさに、今までの日本的なビエンナーレの裏返しというか反動みたいなもので、日本で初めて実現した西洋型のビエンナーレだと思います。すなわち、極めてとんがった人がトップに立ち、その人がディレクターシップを発揮して、全面自分のコンセプトで展覧会を開催しますという形です。これは、西欧のドキュメンタなどでは全く普通のやり方です。もっとも、そのようなやりかたは、あくまでエリートが一部のエリートに対して発信しているというものです。日本でもエリートを自称している人にとっては、あのようなビエンナーレは評価されるのだと思います。だけれども、日本型のビエンナーレが普及・定着しつつあるなかで、今回の横浜トリエンナーレのような試みに対しては、結局のところ「面白いのだけど難しい」という評価しか、表面的には出てこないのではないかと思います。

熊倉氏:日本は、農村の方々も含めて、もともとのすごい文化力の高い国民だということを各地で再発見します。市民の文化力やトレランスが上がっているから、各地でアートプロジェクトが成立するのだと思います。地域型の芸術祭は、美術界からは大衆化を揶揄する批判ももちろんありますが、金沢21世紀美術館などの功績を含めて、クリエイティブな事に関心の高い人々を現代美術に引き付ける努力が全国各地で熱心に行われ、享受層が広がったからこそ、札幌や横浜の芸術祭のような、知的で哲学的で、かつ質の高い国際芸術祭が日本でも一定の市民的評価を受けるようになったと思います。1990年代初頭だったら、今回の横浜トリエンナーレのような試みには、おそらく1万人ぐらいしか入りませんでしたものね。

さて、もうあと20分しかないので、オリンピックの話題にまいりますが、次のオリンピック・パラリンピックに、今、何を期待なさっているのか、現代芸術に限らず、それぞれのお考えを述べていただければと思います。基調講演にもありましたように、オリンピック会期中はともかくとして、その前4年間、リオ大会が終了してから東京大会までがカルチュラル・オリンピアドである。と、東京都としては、東京だけで文化事業を展開するのではなく、ロンドンオリンピックに倣って全国でやっていきたいねとなっています。そして、2020年も、ただのお祭りで終わらせるのではなく、その後にレガシーとして、精神的な文化、あるいは日本人の誇り、そういうようなものに何を残していけるのか、ということが一番大事だということは、現在文化庁の審議会のほうでも話し合われているんですけども、そういうことと関連して、2020年に向けて、いかがでしょうか。東京以外は、あまり関係ないという声もあるようですが、上田市長いかがですか。

上田市長:オリンピックといえば、札幌、長野、東京がオリンピックシティとなっています。私どもも、2020年が東京に決まり、嬉しく思っておりますし、サッカーなどの予選が札幌で行われることが予定されておりますので、それに向けて、みんな楽しみにしています。オリンピックは、私どもも市として体験しており、また、今年中に東京オリンピックの次の2026年の冬季オリンピックを目指そうという議論

が今高まっております。2030年になるかも分かりませんが、それを目指して、まちづくりしていかうという機運が大変高まっておる状態であります。

オリンピックっていうのは、そのイベントがうまくいくのは当然のことでありまして、世界から素晴らしい人たちが集まるわけですから、これが失敗するわけではないんですね。2020年に向けて、私どもは、それまでがまさに、私たちの運動であり、活動であり、その機運を自分たちがどう自らを芸術としていくかという自己変革をしていく過程としてのアプローチというか、一番大事なことだと考えておりますので、オリンピックに目標が定まったという意味合いでのリピートということで、いろんな取り組みをして、関連付けて、自己改革をしていく。まちづくりを改革していく力にしていくということが、とても大事なことだと思っています。

熊倉氏:ありがとうございます。関口市長、いかがですか。

関口市長:私どもは、本当に2020年東京オリンピック・パラリンピック決定して良かったなと思っているんです。もちろんスポーツも、いろんな取り組みをします。そして、できればホストシティとして、どこかの国と一緒にずっとオリンピック・パラリンピックを目指して、やっていきたいと思うんです。我々、クロアチアの皆さんと、サッカーである意味仲がいいもんですから、そんなことができればなと思っているんですけども、もちろん、その中では、スポーツだけではなくて、文化的な芸術祭も含めてきっといろんな交流ができると思うんです。

来年2015年は、2018年、あたりをターゲットにして、しっかりと受け入れ準備やっとかないかんと思っています。それはもうリオの後ってことですから、多分、随分と盛り上がっているんだと思います。我々の市民は、要はおもてなしが大好きなんですね。ですから、トリエンナーレの期間中においでいただくと、みんな思いっきり、おもてなしするわけですよ。大地の芸術祭は大好きなんだけど、もう、おもてなしが忙し過ぎて、他全然見れなかったっていうのは結構多いんです。それぐらいのめり込むんで、まさに大衆化になったかもしれませんが、名もなき人たちが美術を本当に楽しんで、交流を楽しんでいます。ですから、そういう中に、2020年という枠組みができたというのは、本当にありがたいと思います。

もう一つ、やっぱり、市長として、特に子どもたちに頑張ってもらいたいと思っているのは、やっぱり英語だとか語学の問題ですね。日本人はまだちょっと苦手ですからね。少し練習して少し話すと、より楽しくなるというのが絶対あると思うんです。ですから、英語も中国語も韓国語も全部含めなんですけど、そういう意味で、この経験をうまく活かして、物怖じしない、恥ずかしがらない、また違う種類の日本人がたくさんできてくるといいかなと。その準備はしなきゃいかんと思っているところでございます。

熊倉氏:ありがとうございます。確かに、サッカーのワールドカップのときに、自治体が自分の国じゃないチームを受け入れて、それを応援するというのは、とてもすてきだったので、今度のオリンピックでも、自国じゃない国を応援する日本人みたいなのが見えたら面白いんじゃないかなと、私も思っています。ありがとうございました。

門川市長、京都は大変なことになりそうです。皆さん、オリンピック行って、京都見て帰るんじゃないでしょうか。

門川市長:50年前の東京オリンピックではそうでもなかったみたいです。今、オール京都で2020年にどうしていくかということを検討しているんですけど、いろんな花街の人に聞いていると、「そんな忙しおまへんでしたで」って言うてはる。まあ、しっかりと取り組んでいきたいと思えます。それで、2020年、東京オリンピックに向けて、政令指定都市でいち早く推進体制を立ち上げたり、いろんなことしてきました。東の京でオリンピック、本当の京で文化芸術。こんなことを言うたら、怒られるかもしれませんが。

それで、早速、「京都文化芸術プログラム2020」の策定に取り組んでいます。京都市は何よりも市民生活の中に文化芸術が息づき、さらに都市としての創造力を発揮する、まさに創造都市の概念です。そうしたことを、しっかりと実践していく。また、2010年から2015年までの観光振興計画がありまして、今116の事業を推進しています。「京都に行ったら、いつもいっぱいやな。京都はほっといても、ようけ人が来はるな」こういうようにおっしゃるんですけど、決してそうではないです。十数年前、大阪の花博のときで1000万人で、その後、ずっと停滞していたのが京都なんです。100の事業をしっかりと取り組み、特に外国からの受け入れ環境の改善等してきました。例えば、小さな旅館が人気なんですね。ところが、そこは多言語対応できない。それで、京都市で24時間5ヶ国語対応のコールセンターを作る。これを奈良にも大津にも広げていくと、こんなことをやっているわけです。

それで、あらゆる取り組みを、全国の自治体と連携してやっていく。そのときに一番大事なのは何かというと、やっぱり一過性の催しにしないこと。だから、6年後を目指すんじゃないしに、毎年何をしていくか。例えば、今、十日町の市長がおっしゃったんですけど、こんなことを今年から始めようと思えます。6年後に大学生、社会人になっている小中学生に華道、茶道、あるいは着物の着付け、これを体験させ、それを英語で説明できる。オリンピックのときに、しっかりとおもてなししましょうということで、今、覚える、体験する、それを英語で説明するというモチベーションを掲げながら、これをやると、一生もんですから、そういうことを一つやる。

もう一つは、こんなことがありました。この7月に、世界で最も影響力のある旅行雑誌といわれている『トラベル・アンド・レジャー』。ニューヨークで発行されています。月刊100万部売られています。19年間、大規模な読者アンケートで、ワールドベスト都市というのを発表していました。2年前に、日本の都市で初めて、ベスト10入りしたのが京都で9番でした。それが、去年5番になりました。2020年、1番を目指そう、世界で最も憧れられる都市にしようと思ってたら、今年1番になりました。これ、維持していくのに大変なんです。そんな第1番が、風景、景観。2番目が文化芸術。3番目が食文化なんです。4番目が人、おもてなし。5番目が価値。この点で京都が1番になったということは、私は、日本に対する評価だと思う。

この間、京都に伝わる日本の文化を大事にしようということでやってきました。例えば、7年かかりましたが、この8月中に屋上の看板全部撤去していただいた。パチンコ屋さん、ファッションホテルの電飾の看板、全部撤去していただいた。あと少し残っていますけども、赤い看板、大き過ぎる看板、現時

点で2万3千撤去していただいた。屋上の看板撤去してもらうのに、足場代だけで100万円かかる。全部自己負担です。これを、2万3千ですからね。壮絶な取り組みであります。そうしたことが、非常に評価された。同時に、市民ぐるみのおもてなし部で、3年前に観光おもてなし大使制度を作り、観光おもてなし課長を配置してやりましたが、マスコミに一切注目していただけませんでした。京都の発信力が弱いからですね。去年初めて「わ。すごかったんですね」と、なったんですけど、こういう市民ぐるみの取り組みをしているということなんです。

もう1点だけ、外国から来られた方が、古さと新しさが絶妙に調和していると、これはいいことであると。だから、今度、現代アートもやっていこうとなりましたが、古さのほうが、どんどん消えております。アメリカのピーター・グリーリーという ジャパンソサエティの理事長が、久しぶりに京都で年末年始過ごされました。「除夜の鐘も素晴らしかった。お雑煮も良かった。お寺参りも良かった」と、感動された。しかし、「クリスマス飾りが増えましたが、門松は減りました。」と、寂しそうに言われる。「着物姿が減りましたね。」と言われる。

現代アートをどんどんやりましょう。クリスマス飾りもいい。しかし、外国から日本に来られる方は、その土地、その土地の伝統、その精神文化も含めて、こういうことも求めておられる。従って、これを大事にしなければならない。私ずっと着物を着ていますが、京都で、世界で最高の織物といわれている、その一つ、西陣織が出荷額が最盛期の8%になりました。京友禅は2.8%になりました。今、着物買うといってください。20年後に重要文化財になります。いや、担い手が60代、70代になっています。日本の工芸が、そのほんまものが危機に瀕している。やっぱり、伝統的な工芸など伝統産業があって伝統文化がある。そこから、イノベーションを起こして、また現代アートもある。

だから、日本人が1000年を超えて大事にしてきたものを、今大事にしなければならない。同時に新たな挑戦もしなければならない。こんなこと感じています。これをオリンピックの機会にやっていきたいな、と、こういうことです。

熊倉氏:ぜひ、お茶やお花の先生方や旅館のおかみの方々の着物経費が必要経費として認められるといいですね。

林市長、お待たせしました。もちろん、東京2020に関しては強い期待をお持ちかと思いますが、いかがでしょう。

林市長:今年の3月に、文化芸術立国中期プランが取りまとめられました。そして、東京オリンピック・パラリンピック大会を大きな社会変革の機会だと位置付けていただきました。今日の冒頭での青柳文化庁長官のスピーチも、本当に私たちを励ますものでした。日本はすごい勢いで経済成長してきて、今、大変な踊り場で苦労しておりますけれども、文化芸術が全ての都市のベースになるものなんだということ、それが大きく日本全体を支えることになるということをはっきり言っていただいたというのは、あまり記憶になかったように思います。

実は、横浜市はこれだけの都市でありながら劇場がありません。ご承知のように、フランスだったらパリのオペラ座、モスクワにはボリショイ劇場がございます。そしてそこには、専属のバレエ団がある。

例えば、ウィーンに行けば国立歌劇場があって、オペラとバレエをほぼ毎日、演目を変えて上演しています。日本には、そういうものは、ほとんどないと思います。

今回、各都市の市長さんが揃いましたけれど、それぞれ本当に魅力的で、全然違う。同じ日本の中で、これだけ文化も違う、持っている芸術性も違う。こういう所が成長戦略の一つなんだということを言っただけです。私は、この東京オリンピック・パラリンピックに向けて「地方創生」に取り組みたい、横浜市を、芸術家を尊敬するまち、芸術家が住みたいまちにしたいと思っています。何十年もかけて修練して、素晴らしい芸術を提供して下さる方たちが、あまり大事にされないような雰囲気、今、日本にあるんじゃないかなと思います。文化庁や国が、東京オリンピック・パラリンピックは文化芸術の祭典でもあるんだ、ぜひやってほしい、と言っただけです。これを私たち、このネットワークで手を繋ぎながら、それぞれの得意とするところを生かしながら、文化事業を着々とやりたいと思います。

口幅ったい言い方になりますが、来年予定しているダンスのイベントは、オリンピックの文化芸術活動のモデルケースになるべく取り組みたいと思っています。CCNJで統一したロゴなどを作って、東京オリンピックまでのあと6年弱を皆さんと一緒にやっていきたいなと思っています。九都県市会議という、私どもの（関東）近郊の県知事と市長が集まる会でも、オリンピック・パラリンピックを契機とした文化芸術施策の強化ということを宣言しております。

今回の横浜トリエンナーレは、障害のある方とアーティストの協働から生まれる現代アートの国際展「ヨコハマパラトリエンナーレ」が、横浜トリエンナーレと連携して開催されていることは大変素晴らしい状況でございます。パラリンピックに向けても芸術活動を盛んにできると思います。とにかく、私どもが手をつなげば、本当に素晴らしいムーブメントが起きると思いますので、そういう意味で、ぜひ一緒にやっていきたいと思っています。

熊倉氏：太下さん、締めコメントをお願いします。

太下氏：オリンピックについて、一言触れておきたいと思っています。実は、オリンピックは「文化の祭典」である、ということは、この場に参加されているみなさんの間ではかなり共有されていることかと思うのですが、一方で、仕事柄、私が地方の文化政策の関係で地方都市などに行くと、まだ地方の方々、「オリンピック？ あれは東京の話でしょ」と冷やかな態度をとる方が多いようです。先ほど熊倉さんからご紹介あったとおり、2012年のロンドン大会のときには、イギリス全土で1200カ所以上、その大半がロンドン市外ですが、全体で18万件以上もの文化イベントが行われたということです。恐らく、東京オリンピックのときにも、日本は全国で同じような状況になるでしょう。一方で、今年の2月に文化庁さんと観光庁さんと東京都とブリティッシュ・カウンシルが共催して、ロンドンオリンピックのキーパーソンを呼んで講演会を行ったときに、盛り上がった話として、ロンドンは、オリンピックに合わせて観光キャンペーンやりましたという話がありました。それが「ロンドンプラス」ですね。すなわち、ロンドンに来た方を、もう1都市プラスワン、もう2都市、プラス2というかたちで国内観光してもらおうというキャンペーンだったのです。その成果は、取りあえず置いて、それを聞いた観光庁の方が、ロンドンプラスと同じように、「東京プラス」というキャッチフレーズを打ち出しています。しかし、

私は、打ち出すべきキャッチフレーズは逆だと思うのです。何が逆かというと、2020年の7、8月の実際の東京の状況を考えてみると、羽田と成田のフライトはもうフル稼働だと思います。現に今、羽田空港はいかに増便するかという議論をしていますね。そして都内のホテルも既に足りないのではないかと、という予測が出されています。ところで、イギリスと日本の国土構造の違いをみてみると、日本は、新幹線や国内のフライトも含めて、極めて東京集中のネットワークのフリークエンシーが高いのです。そして、なぜか、各地方に国際空港があります。そう考えると、海外からの観光客を羽田空港や成田空港に呼ぶのではなくて、地方の国際空港にダイレクトに呼んで、地方都市にステイしてもらって、もしオリンピックの試合見たいのだったら、新幹線とか飛行機で通ってもらえばいいのだと考えています。だから、観光庁が提案している「東京プラス」ではなくて、逆転させて、行きたい人はプラスで東京へ行けばいいという「プラス・トーキョー」の戦略を絶対とるべきだと思います。それが、日本全体の地方創生にもつながるのだと思います。ただし、逆の立場で考えて、もしもロンドンオリンピックのときに、ロンドンの空港には入れないから、どこでもいいですから地方都市に行ってください、と言われても、海外の観光客は困ってしまいますよね。では、どの都市・地方に行ったらいいのだろう、という時に文化プログラムが大きなアトラクティブになるのです。この都市にはこんな文化がありますというプロモーションを行うべきなのです。「この期間はこういう文化プログラムをやっていますよ」という情報発信が海外からの観光客を引きつけることなのです。まさに、いい意味での競争が起こるのですね。わが都市は、こんなおもてなしができますとかいうかたちで。そして、日本全国でいかに観光客を引きつけるかという、いい意味での文化的な競争が起こるのだと思います。こういう戦略を徹底的にやればよいと思います。ぜひ、「プラス・トーキョー」戦略を全国で盛り上げたいと思います。

熊倉氏:そうですね。オリンピックの期間中は日本旅行は高いだろう。いやいや、こちらから入れば格安です、とね。あなたの国をわが町で一緒に応援しませんか、みたいに、いろんな所で盛り上がったりして、新しいオリンピックの訪れ方になるかもしれません。というわけで、皆さまに熱く語っていただきました。パネリストの皆さま、ありがとうございました。会場の皆さまも、ご清聴ありがとうございました。

まとめ 創造都市ネットワーク日本の顧問 国立新美術館館長 青木保氏

横浜トリエンナーレ行きました。2週間ほど前に参りまして、大変楽しく半日過ごさせていただきました。横浜ジャズプロムナードも同時にやっていたものですから、両方見ようと思って参りました。もちろん中華街がなければ来なかったかもしれません。(笑) やはり山下公園をはじめ、横浜での散歩というのは素晴らしいですね。東京から来ますと、空気が変わりますね。東京から30分ぐらいで、ハッと空気が変わって、横浜は全然東京と違うことが分かります。高層ビルなんかは似ているんですけども、実は、町の空気が全然違う。

今日の8都市の市長さまのお話を聞いていて大変感動したのは、やはりそれぞれの地域のいわば特性というか、魅力をいかに生かすかということです。ただ、単に、ここにこういうイベントがありますだけでは駄目で、お話があったように、国際性とかグローバル化の中で、いろんな新しいものも取り入れながら、やっぱり本来の特色も発揮することが必要だと思います。文化の目玉があると、それを目当て

に行って、同時に食文化も、それから街並みやアートも味わえるような、そういった複合的な計画が必要です。これ一つだけだっというのはだめですね。札幌は、僕も行ったことのあるパシフィック音楽祭がありますね。それから、札幌ジャズですよ。それで、今やアートですから、複合的な文化力ですばらしい。

僕は、若い時は札幌といえばジンギスカンです。ジンギスカン料理をいっぱい食べたい。しかも、僕はアジアにもよく行きますから、そういった食べたものとか見たものについてアジアでもいろんな人と言って「札幌すばらしい。」と。

金沢21世紀美術館の良さが、現代アートと子どもを結びつけ、現代アートが楽しいと感じさせるようになった。これはすごいことです。日本を代表する建築家の妹島・西沢両氏のグループが作った美術館の構造もいいんだと思います。この間9月には金沢ジャズストリートに行ってきました。今年は、もう素晴らしい秋日和の金沢で最高でした。もちろん行けば、ジャズだけじゃないです。お寺にも行くし、神社にも行くし、もちろん、武家屋敷も見ると、おいしい料理も食べますし。この複合的な魅力は、やはり大事です。越後妻有も前から行きたい、行きたいと思っているのですが、ジャズを入れれば絶対行きます。勝手に言うてすみません。（笑）都市の魅力とか場所の魅力というのは、いろんな形であるので、食文化だけ、アートだけにしぼることはありません。

それから篠山市、丹波篠山は、行ったことありますけども、やっぱり独特な場所です。京都とも違う。京都の奥にあって素晴らしい、やっぱり何か雰囲気がある感じがします。それが何よりもまして深い魅力を感じさせます。

先ほども門川市長もおっしゃっていたように、いま国際博・美術館会議（ICOM）の件で、いろいろとお世話になっているのですが。京都国立美術博物館で鳥獣戯画展をやっているでしょう。今、京都に行こうとすると、宿が全然取れない。ホテルいっぱいですよ。だから、「しょうがない。神戸に泊まってくか」とか「まあ、しょうがない。滋賀に行くか」とか、いろいろと考えるんです。京都は、素晴らしい所がいっぱいあるんですが、泊まる所をもっと考えていただくとありがたいです。それに京都なのに六つ星クラスのホテルがありません。もっともリッツ・カールトンが来るという話ですが。

金沢もそうですよ。金沢も素晴らしいんですけど、市内で、やっぱり本当の一流ホテルがない。旅館や料亭があるんですけどやっぱり本当にいい世界的なレベルでの一流のホテルが必要です。そういう期待はすごくあります。

ただ、先ほどおっしゃったようにこれだけ、トリエンナーレ、ビエンナーレ、あるいはジャズフェスティバルが、全国で、年間大体100から150ぐらいあるわけです。これらが一過性のイベントで終わってしまいますと、あまり生産的ではない気がします。それに日本のアーティストは、本当に悲惨な状況です。個々のアーティストが、どんな生活をしているか。本当に人材育成という点では、これは漫画やアニメ、ゲームもそうなんですけど、日本の誇るアートを支える人材を、どこもきちんと面倒見ようとしていない。去年、政府の国家戦略特区の構想に、私どもも、六本木アート特区構想を出したんですけど。六本木には国立新美術館とサントリー美術館、森美術館、それから三宅一生さんの21_21、4つも美術館があるんです。六本木というと、以前は大体ダーティーなイメージで、麻薬とか犯罪だとか、暗黒社会が何とか、というのが出てくる部分もあるのですが、今やアートの街として知られるようになりました。

アートによって街のイメージ全体が変わった。来る人も変わってきます。安心して子供も老人も女性も来る。

こういうことを言い始めるときりがないので、いま中国や韓国、東南アジアから観光客がいっぱい来ます。いっぱい観光客が来ているんだけど、みんな、銀座とか秋葉原とか行って、貴金属を買ったり、家電製品を買ったりするばかりで、アートのほうへ仲々来てくれない。アジアの人たちが、日本に行ってアートを見、音楽を聞き、あるいは、おいしいもの食べると、そういうような観光の誘致の観光文化政策というものを、各地域、各市町村が全面的に出して、積極的にキャンペーンする時代になってきたと思います。創造都市ネットワークをフルに活用して、そういうキャンペーンをやっていただきたいと思うんです。

目玉が必要です。目玉を作るということ。世界の人たちが日本に行きたいという気持ちを起こさせる文化の目玉を。アジアの人たちが求めているのは、一つは安心安全に過ごせる。それから、ともかく、いろんなものが自由に買える。また、例えば、自国内では禁じられているアニメ、マンガも日本では自由に見られるとか、そういうキャンペーンをして、日本へ行けば何か付加価値がある、と。ただ単に一般観光と商品の買物を考えるんじゃないと。オリンピックを目指して、ますます、海外発信を個々の市からしていただく。それによって実は日本人も、いろんな所に行って楽しめる。

高齢社会もみじめだったらしいことでは決してない。みんな生活を楽しむ達人が住んでいる所だぞ、というようなキャンペーンも門川市長にやっていただいて、というふうにも期待しています。

今日は各市町村の市長さまの素晴らしいスピーチを聞きまして感動しました。横浜市長さんから素晴らしいスピーチを聞きました。文化についての本当に心がこもったスピーチだった。今日の創造都市のご報告、私個人も学びかつ楽しませていただきました。すごく刺激を受けて、凄い感銘を受けました。本当にどうもありがとうございました。

「本日の会議を契機に文化庁と創造都市ネットワーク日本が、文化芸術創造都市を、さらに推進していくことの宣言」CCNJ代表 山野之義金沢市長

たくさんの市長さんにお集まりいただきました。長官もいらっしゃいます。今までの議論を踏まえまして、自治体サミット宣言をさせていただければと思います。読み上げる形で進めたいと思います。

創造都市ネットワーク日本 自治体サミット 宣言

2020年のオリンピック・パラリンピック競技大会が東京で開催されることが決定しました。オリンピック憲章では「文化プログラム」の実施について定められており、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会は、文化芸術活動においても、日本全体の取組を一層加速する、重要なきっかけになると考えています。

「創造都市ネットワーク日本 自治体サミット」では、東京オリンピック・パラリンピック競技大会を契機として日本のプレゼンスを高めていくために、世界に誇る日本の文化的な景観や資産を活かしたまちづくり及び日本各地で行われている芸術フェスティバルを積極的に世界発信していくこと、創造都市ネットワーク日本はそのプラットフォームとして機能していくことの重要性を確認いたしました。

この会議に参加した文化庁、自治体、NPO等団体及び参加者は、「2020年に日本が『世界の文化芸術交流のハブ』となる」という目標に向けて、ネットワークを広げるとともに、文化芸術活動を強力に推進していくことをここに宣言します。

平成26年10月31日

文化庁長官 青柳 正規

創造都市ネットワーク日本 自治体サミット

首長サミット登壇都市

札幌市長	上田 文雄
鶴岡市長	榎本 政規
横浜市長	林 文子
十日町市長	関口 芳史
金沢市長	山野 之義
京都市長	門川 大作
篠山市長	酒井 隆明
奈良市長	仲川 げん

参加団体・参加者一同

-拍手

山野氏：今ほどは、宣言をお認めいただきまして、誠にありがとうございます。大変勉強になりました。最後の、プラス東京は面白いですね。しっかりとやっていければいいなと思っています。CCNJを通して、ネットワークを強固にしていくということは、逆説的に聞こえるかもしれませんが、それぞれの都市の個性により一層磨きをかけなければいけないということになってくると、私は思っています。同じような都市であるならば、ネットワークを組む必要は全くないと思っていますので、CCNJのネットワークをより強固にしていくためにも、それぞれの都市が、それぞれの都市の個性にさらに磨きをかけることによって、ネットワークのシナジー効果を高めていくことができると思っております。本日は、大変有意義なご議論をいただきました。また、宣言を決議いただきましたことを、あらためて御礼を申し上げまして、私からのごあいさつとします。本日は、本当にありがとうございました。

閉会